

# 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8

菊塚古墳

三井遺跡



平成15 (2003) 年3月

善通寺市教育委員会

# 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8

菊 塚 古 墳

三 井 遺 跡

平成15 (2003) 年 3 月

善通寺市教育委員会



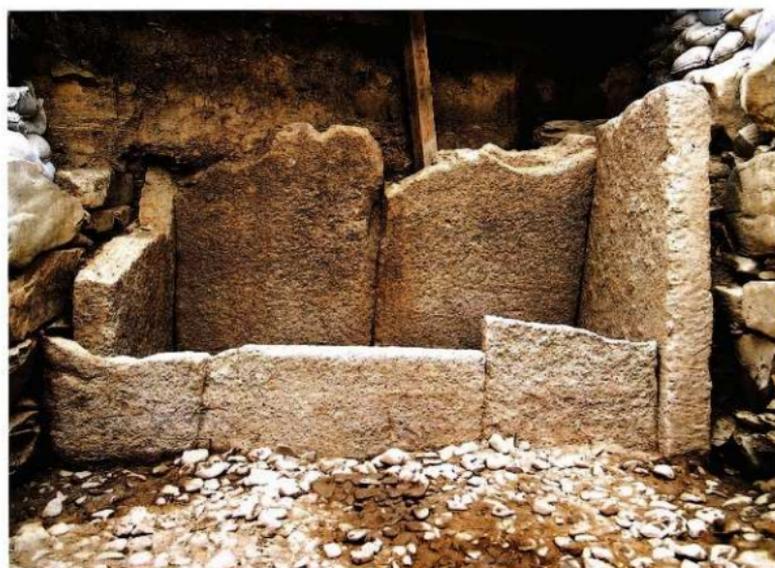
1. 石室床面検出状況（東から）



2. 石室床面検出状況（北東から）



1. 玄室床面検出状況（南から）



2. 石室形全景（南から）

## 序 文

普通寺市には数多くの埋蔵文化財が残されており、これらが発掘調査されるたびに新たな発見があり、そして新たな謎の解明が始まります。

今回調査しました普通寺町「菊塚古墳」、中村町「三井遺跡」におきましても、多くの成果をあげることが出来ました。

丸亀平野で最大級の前方後円墳でありながら、実態がほとんどわかっていなかった菊塚古墳では、昨年度の調査によって中・四国で2例目となる「石屋形」が発見され大きな成果をあげましたが、今年度の調査では主体部の構造や、豊富な副葬品などその具体像が明らかになりました。菊塚古墳につきましては今後も継続して調査を行い、保存・活用のための基礎資料の蓄積を行っていく予定です。

このたびの普通寺市内遺跡発掘調査事業実施にあたり、多大なご配慮・ご協力を賜りました関係者ならびに地権者の方々、また報告書刊行にあたりご指導を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

普通寺市教育委員会  
教育長 勝田 英樹

## 例 言

1. 本書は普通寺市教育委員会が平成14年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（普通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は普通寺市普通寺町字大池東（菊塚古墳）において平成14年8月5日から11月28日まで、同中村町（三井遺跡）において平成15年1月24日および2月24日に発掘調査を実施し、現地での調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。調査は普通寺市教育委員会文化振興室主事 海邊博史（菊塚古墳）、同 渡邊淳子（三井遺跡）が行った。
3. 本書の執筆は海邊、渡邊および独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 富永里菜、関西大学大学院生 松本健太郎、関西大学文学部考古学研究室 長江真和が行った。執筆は第2章第10・14節を松本が、第2章第13節【馬具】を富永が、第2章第13節【須恵器】を長江が、第3章を渡邊が、その他を海邊が行った。編集は文化振興室室長補佐 笹川龍一の指導のもと、海邊が行った。各遺跡の実測は、海邊・渡邊および下記の調査補助員が行った。遺構の写真撮影は海邊・渡邊・松本が行ったほか、巻頭図版の写真（菊塚古墳）については（財）香川県埋蔵文化財調査センター 森下英治氏に依頼した。遺物の写真撮影のうち、【馬具】は独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏に依頼した。【須恵器】は長江および南田尚紀が撮影した。また本書に掲載した遺構・遺物の実測・製図は、海邊・渡邊・富永および調査補助員が行ったほか海邊麻理子・加納裕之・中里伸明各氏のご協力を得た。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質、網掛けが瓦質土器を表す。

4. 事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・ご援助ならびに資料提供、ご助言を得た。記して謝意を表します。

財香川県埋蔵文化財調査センター・関西大学文学部考古学研究室・四国学院大学考古学研究所・大和ハウス・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・阿部泰之・尼子奈美枝・飯島哲也・石田成年・大久保徹也・大平哲世・大野 愛・大平国丸・大森信宏・大谷宏治・小野秀幸・柿沼菜穂・片桐孝浩・菊間崇史・木許 守・蔵富士寛・蔵本晋司・高妻洋成・塚塚隆保・小林謙一・佐藤竜馬・白川雄一・白澤 崇・竹内直文・中原幹彦・丹羽佑一・信里芳紀・乗松真也・橋本正春・峰谷浩美・花谷浩・濱野俊一・深田 浩・藤田和尊・藤本貴仁・正岡大実・町田 章・松田朝山・松本和彦・松本敏三・宮脇武一・森 麻子・森 格也・森岡秀人・森下英治・山下大輔・吉田健一・吉田 綾・米田文孝・渡部明夫（順不同・敬称略）

調査補助員：松本健太郎（関西大学大学院生）・中野 咲・首藤崇志・大久保順子・竹野裕二・長江真和・歌房美美子・梅崎由梨・米田裕貴子・更家由美・西川英志・松並真帆・松村祐香・宮本 舞・森田浩史（関西大学文学部考古学研究室）・細川大介・松林 潤・土井辰宜・三浦雅裕・田辺 茂・田村隆明（四国学院大学考古学研究所）

5. 菊塚古墳は平成12年度より継続して発掘調査を行っており、普通寺市内遺跡発掘調査事業発掘調査報告書として刊行されているので、参考にして頂きたい。なお、今年度菊塚古墳から出土した遺物の大部分は、現在も保存処理や分析・整理作業が行われており、この作業が完了した遺物については、順次公表していく予定である。

# 目 次

序 文

例 言

第1章 遺跡周辺の地理と歴史	1
第2章 菊塚古墳	6
第1節 調査の経緯と経過	6
第2節 調査の方法	7
調査日誌抄	7
第3節 古墳の立地	12
第4節 石室検出状況	12
第5節 羨道	16
第6節 玄門	19
第7節 女室	20
第8節 奥壁	22
第9節 天井	22
第10節 石屋形	22
第11節 平面プラン	25
第12節 床面	25
第13節 遺物出土状況	26
第14節 石室埋土土層	27
第15節 出土遺物	32
第16節 まとめ	43
第3章 三井遺跡	45
第1節 調査の概要	45
第2節 遺構・遺物	45
第3節 まとめ	46
主要参考文献	47
図版	49

## 挿図目次

第1図	普通寺遠景	1
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	2

### 菊塚古墳

第3図	周辺主要古墳位置図	6
第4図	玄室内転落天井石除去風景	8
第5図	作業風景	8
第6図	調査指導風景	8
第7図	後円部墳丘測量およびトレンチ位置図	13
第8図	石室検出状況図	14
第9図	石室上面図	15
第10図	石室実測図①	17
第11図	石室実測図②	19
第12図	石室横断面図	20
第13図	石室石材同定図	23
第14図	石室形内玉砂利実測図	24
第15図	玄室床面上層遺物出土状況図①	28
第16図	玄室床面上層遺物出土状況図②	29
第17図	玄室床面遺物出土状況図①	30
第18図	玄室床面遺物出土状況図②	31
第19図	石室内埋土土層断面図	33
第20図	出土馬具実測図①	36
第21図	出土馬具実測図②	37
第22図	出土須恵器実測図①	38
第23図	出土須恵器実測図②	39

### 三井遺跡

第24図	調査区周辺遺跡分布図	45
第25図	調査区トレンチ配置図	46
第26図	調査区平断面図	46

## 表目次

第1表	出土遺物一覧	35
第2表	出土須恵器観察表①	40
第3表	出土須恵器観察表②	41
第4表	出土須恵器観察表③	42

## 図版目次

### 菊塚古墳

- 巻頭図版1-1 石室床面検出状況（東から）  
巻頭図版1-2 石室床面検出状況（北東から）  
巻頭図版2-1 玄室床面検出状況（南から）  
巻頭図版2-2 石屋形全景（南から）

図版1-1	古墳遠景（北から）	50
図版1-2	古墳遠景（東から）	50
図版1-3	古墳遠景（南から）	50
図版2-1	石室検出状況（南から）	51
図版2-2	石室検出状況（東から）	51
図版2-3	石屋形検出状況（西から）	51
図版3-1	玄室床面上層遺物検出状況（南から）	52
図版3-2	玄室床面上層遺物検出状況（東から）	52
図版4-1	玄室内馬具出土状況（1）	53
図版4-2	玄室内馬具出土状況（2）	53
図版4-3	玄室内馬具出土状況（3）	53
図版5-1	玄室内裝飾付台付壺出土状況（1）	54
図版5-2	玄室内裝飾付台付壺出土状況（2）	54
図版5-3	玄室内裝飾付台付壺出土状況（3）	54
図版6-1	石屋形内金銀出土状況	55
図版6-2	玄室床面玉類出土状況	55
図版7-1	玄室床面遺物出土状況（西から）	56
図版7-2	玄室床面遺物出土状況（部分・東から）	56
図版8-1	玄室床面鉄製品出土状況（1）	57
図版8-2	玄室床面鉄製品出土状況（2）	57
図版9-1	玄室床面須恵器出土状況（1）	58
図版9-2	玄室床面須恵器出土状況（2）	58
図版9-3	玄室床面須恵器出土状況（3）	58
図版10-1	玄室床面上器出土状況（南西隅）	59
図版10-2	玄室床面上師器出土状況（1）	59
図版10-3	玄室床面上師器出土状況（2）	59
図版11-1	玄室床面完掘状況（西から）	60
図版11-2	羨道床面完掘状況（北から）	60
図版11-3	玄室床面下層深掘りトレンチ（南から）	60
図版12-1	玄室右側壁（東から）	61

図版12-2	玄室右側壁南西隅（北東から）	61
図版13-1	玄室左側壁（西から）	62
図版13-2	玄室左側壁南東隅（北西から）	62
図版14-1	石屋形内玉砂利検出状況（南から）	63
図版14-2	石屋形内完掘状況（南から）	63
図版14-3	石屋形内完掘状況（東から）	63
図版15-1	石屋形北西隅（南東から）	64
図版15-2	石屋形北東隅（南西から）	64
図版16-1	石屋形南西隅（北東から）	65
図版16-2	石屋形南東隅（北西から）	65
図版17	鏡板・杏葉	66
図版18	辻金具	67
図版19	鏡板（X線写真・等倍）	68
図版20	杏葉（X線写真・等倍）	69
図版21	辻金具（X線写真・等倍）	70
図版22-1	須恵器 坏身・坏蓋	71
図版22-2	須恵器 高坏	71
図版23-1	須恵器 坏蓋	72
図版23-2	須恵器 坏身	72

### 三井遺跡

図版24-1	調査区全景（南から）	74
図版24-2	Aトレンチ掘削状況	74
図版24-3	Aトレンチ全景（東から）	74
図版25-1	第1トレンチ全景（南西から）	75
図版25-2	第2トレンチ全景（北西から）	75
図版25-3	Bトレンチ南壁土層断面（北西から）	75

## 第1章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師（空海）が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町・満濃町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、大部分の位置から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う発掘調査によって、この土層が縄文時代後期から晩期にかけての堆積土であることを確認した。

善通寺市北側には、讃岐の中世山城を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西側から東側にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・春色山が麓を連ねて並んでいる。五岳山と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ古くから信仰の対象であった。その南側には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平野部には甲山・鶴ヶ峰・磨白山・如意山・鉢伏山・与北山などの小丘が散在している。

丸亀平野は、瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれ、古くから文化が開けていた地域であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される五重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井遺跡・五条遺跡では、遺跡の範囲について現在も全く不明の状態であるが、出土した土器については、畿内第Ⅰ様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを測るが、当時の復元海岸線が現在の標高5m辺りと推定すれば、三井遺跡・



第1図 善通寺遠景

背後の山は左端から大麻山・春色山・筆ノ山・我拝師山（この手前の小丘が甲山）・中山・火上山



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また吉原町からは旧石器も確認されており、現在のところ普通寺市における人類の痕跡は約2～3万年前まで遡ることができるようである。

普通寺市街地の北側一帯には香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西は筆の山の出づから、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと陸軍の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして東側には、九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡が広がっているが、いずれの遺跡も本格的な調査が実施されておらず、その詳細は明らかではない。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数基・多数の土器、石器類が出土したことや、県道整備工事の際に国立病院の周辺から弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から中世にかけての連続性が想定できる泉下でも有数の大遺跡であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群として捉えた方が妥当と考える。

この遺跡群は、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主要な調査を順に紹介する。総本山普通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された普通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。昭和58年には、遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる仲村庵寺（伝尊寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。昭和59年には普通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘立柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる倣製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には

- 1: 阿弥陀堂遺跡 2: 高瀬遺跡 3: 乾遺跡 4: 中村遺跡 5: 永井遺跡 6: 稲木遺跡群 7: 金葉寺下遺跡  
 8: 五条遺跡 9: 九頭神遺跡群 10: 石川遺跡 11: 甲山北遺跡 12: 旧練兵場遺跡群 13 香色山遺跡群 14: 四国学院大学境内遺跡 15: 生野本町遺跡 16: 生野南口遺跡 17: 御恩林遺跡 18: 我拝師山遺跡群 19: 鶴が峰西麓遺跡 20: 瓦谷遺跡 21: 南原麻坂遺跡 22: 北原シネバ工遺跡 23: 下吉田八幡古墳 24: 丸山古墳 25: 鶴が峰4号墳 26: 磨白山古墳 27: 王墓山古墳 28: 宮方尾古墳 29: 野田院古墳 (24～29: 国指定史跡 有岡古墳群)  
 30: 鶴が峰山頂古墳 31: 御館古墳 32: 岡(南光)古墳群 33: 丸山1号墳 34: 丸山2号墳 35: 寺田1号墳 36: 寺田2号墳 37: 熊の巣古墳 38: 大塚山椀塚古墳 39: 大塚山経塚古墳 40: 宮方尾2号墳 41: 瓦谷1号墳 42: 大塚池(吉原椀塚)古墳 43: 北原古墳 44: 普通寺館屋 45: 仲村庵寺 46: 野田院跡 47: 香色山経塚 48: 仲村城跡 49: 甲山城跡

第2図 凡例

入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。そして、国立善通寺病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で検出されており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代前期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方約500mに位置する九頭神遺跡では、昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500m辺りには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺部には、「大集落」というよりはむしろ“小国”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅剣1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土している。また、旧練兵場遺跡の中心部に該当する国立善通寺病院内からも、近年銅鐸の破片が出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が瀬戸内水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となった。その結果、有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・築ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は、前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している。中でも野田院古墳は、大麻山北西麓（標高402m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛土、後円部は積石で構築されている。

有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれ

ている。北東から南西方向に順に生野饅子塚古墳（消滅）・磨白山古墳・鶴が峰2号墳（消滅）・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳などが知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共通したモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と思われる。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の奥津城とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に移転したものが現在の普通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀5（774）年、この地の有力豪族であった佐伯氏から弘法大師空海を輩出する。平安初期、大同二（807）年に唐から帰朝した空海が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として普通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように普通寺の西側に隣接する香色山山頂では、平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした勢力や普通寺の僧侶達が造り上げたものと考えられるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚（香色山1号経塚）が1997年夏に確認され注目を集めた。

14世紀後半になると、西讃岐の守護代の地位を得た香川氏が多度津本台に居館を構える。この香川氏が有事に備えた詰城が天霧城である。天霧城は天霧山から弥谷山山頂を中心とした要害堅固な山城で、陸海いずれの動向にも十分対応できる実戦的な縄張り（構造形式）を持つ城として著名である。香川氏はここを拠点に天正十三（1585）年に城を去るまで西讃岐を支配した。

普通寺は戦国時代、永禄元（1558）年に三好軍の天霧城攻撃に伴い焼失する。その復興が始まるのは、江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ所のうち五カ寺がある普通寺市は普通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29年には陸軍第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びようになるが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより普通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、普通寺市が誕生した。

## 第2章 菊塚古墳

### 第1節 調査の経緯と経過

菊塚古墳は戦前から丸亀平野屈指の首長墳と認識はされていたものの、発掘調査が行われ詳細が判明したのは、近年のことである。発掘調査以前は盾形の周庭帯の存在から中期古墳とする説と後期古墳と考える説が並立していた。以下、年度毎の調査成果を記す。

平成12年度調査 菊塚古墳において、周辺地の圃場整備計画に伴う照会が普通守市教育委員会にあった。古墳周辺の工事は、水路や畦畔の改修が中心で現存する墳丘への影響は無いが、周庭帯の痕跡と推定する地割りへの影響が想定されたため、墳丘南東側の水田を中心に確認調査を実施した。調査の結果、後円部裾部を検出することができた他、周庭帯は基盤層を削り出して構築していることを確認した。

平成13年度調査 以前より後円部墳丘の流出が確認されていたが、墳頂部の菊主神社に通じるコンクリート製舗装路下部の空洞化が確認され、安全面からの改修が急務であった。現状のまま放置すると、墳丘自体が崩壊する恐れがあったため、保存を前提とした墳頂部の確認調査を行った。その結果、主体部が南に開口する横穴式石室であることが判明した。また石室内には、四国・瀬戸内地域では王墓山古墳に次いで2例目の発見となる石屋形を検出した。併せて墳丘の現状を把握するため、後円部の測量調査も実施した。測量調査の結果、後円部は直径39m前後の規模になることが分った。

以上のことを踏まえ市教育委員会は、関係諸機関と協議の上、平成14年度埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行った。遺跡の重要性を鑑み現地調査においては、関西大学文学部考古学研究室に調査協力を依頼した。



第3図 周辺主要古墳位置図 (1:10000)

現地調査については市教育委員会担当者の指導において作業を実施するとともに、関西大学文学部教授米田文孝先生の指導・助言のもとに関西大学大学院生 松本健太郎を中心に考古学研究室学生および四国学院大学考古学研究部の学生が協力した（個別氏名は例言に記した）。

調査は遺構の残存状況をより正確に把握するため、平成13年度に設定したトレンチを拡張して行った。調査面積は約40㎡である。調査期間は平成14年8月5日から同年11月28日まで、整理期間は調査中から適宜行い、平成15年3月31日に終了した。なお、出土遺物については保存処理や分析・整理作業など全てが終了していないため、本報告では一部の掲載にとどめた。

## 第2節 調査の方法

調査は昨年度の調査区を再掘削することから開始した。なお掘削は全て人力で行ったが、玄室内転落石材の除去については、太田匠園（代表 太田文雄氏）のご協力を得た。

石室内流入土の除去については、玄室主軸および中軸に幅20cmの畦を設定し四分法によって掘削を行った。作業効率のため適宜、土層断面の観察・縮尺10分の1での図化・写真撮影を行いながら畦を除去し下層の掘削に努めた。床面上層の遺物出土面で一旦精査し、図化および写真撮影を行った。遺物については、石室主軸・中軸線を基準に50cmメッシュを設定し、縮尺10分の1で出土状況を図化しながら取り上げを行った。石室内埋土は、設定した50cmメッシュ毎に床面直上まで3段階に分けて土糞袋にて取り上げた。取り上げた土糞袋は、隣接地において現地調査と併行して水洗選別を行い残留遺物の検出に努めた。床面の図化は縮尺10分の1にて行ったが、微細遺物の検出状況図は縮尺5分の1で作成した。石屋形内瓦砂利検出状況図については、縮尺5分の1で作成した。玄室内掘削と併行して羨道部の流入土除去も行った。羨道は壁体が内側に傾き崩落の危険性があったため、掘削は玄室部分を先行した。羨道部は幅が狭いため、畦の設定は羨道中央部の横断面のみに留め、主軸線は市松にて掘削した。玄室・羨道を完掘した後、石室壁体実測図を作成した。その後、玄室中軸および羨道中央部に幅10～20cmの深掘りトレンチを掘削し、床面下層の状況を確認・記録した後、埋め戻しを行った。羨道部は上圧による石室崩壊の危険性があったため、壁体実測図を縮尺10分の1にて優先的に作成し、完成後、土糞にて埋没保存した。玄室壁体実測図は羨道壁体実測図が完了後に縮尺10分の1にて図化した。写真撮影は各段階において適宜行った。

なお、石室外の調査については、確認調査という性格上、腐植土の除去のみに留めた。

### 調査日誌抄

8月5日 天気：晴

昨年度の調査後に詰めた土糞袋を除去する。石室奥壁・側壁・天井石および石屋形を検出する。石屋形は石室奥壁側にあり、石屋形の側壁、奥壁が同じ高さである標準的な形態である。午後より調査区を拡張するため上面に敷かれたコンクリー

トを除去する。

8月6日 天気：晴

調査区を広げ掘削を開始する。午後から石室内の埋土を掘削する。

8月7日 天気：晴

調査区を拡張し掘削を行う。併行して石室内の

埋土を除去する。

8月8日 天気：晴

石室内の埋土を掘削する。玄室内の天井石付近から台付長頸壺の破片が出土する。

8月9日 天気：晴

石室内の埋土を掘削する。併行して備置石材の配列状況を確認する。その結果、石室主軸は北西-南東方向で南東方向に開口することが確定する。

8月12日 天気：晴

石室検出状況の写真撮影を行う。その後、転落石材を除去しながら、石室内埋土を掘削する。右側壁は未だ確認できない。埋土中から鉄製品が数点出土する。

8月13日 天気：晴

石室内の埋土を掘削する。石室上面の平面プランが判明する。両袖式で、羨道上部では扁平な割り石を壁体に使用している。

8月14日 天気：曇一時雨

石室上面および石屋形検出状況での清掃を行った後、写真撮影を行う。石室上面平面図を作成する。

8月15日 天気：曇一時雨

石屋形周辺の流入土を除去する。

8月16日 天気：晴

石屋形の検出作業を行う。有岡大池土手上の三角点よりレベル移動を行い、調査区近くに標高を落とす。石室上面の写真撮影を行う。羨道部上面の転落石材を検出する。

8月19日 天気：晴

午前中、玄室内の天井石を除去する。午後からは羨道部石室上面平面図を作成しつつ、羨道上面の転落石材を検出する。

8月20日 天気：曇

羨道部の上面を検出する。石室上面平面図を作成後、畦を設定し石室内流入土を掘削する。

8月21日 天気：晴

石室内埋土を掘削する。調査区を設定する。石屋形右側壁の上面を検出する。途中から欠損しており、破片が石屋形内に転落している。

8月22日 天気：晴

3-4区横断面の写真撮影を行い、土層断面図を作成する。午後には5区縦断面の写真撮影、土層断面図作成を行う。石室東側壁は羽子板状に奥壁に向かって広がっている。1区から鉄留めのある鉄製品が出土する。



第4図 玄室内転落天井石除去風景



第5図 作業風景



第6図 調査指導風景

8月23日 天気：曇

5-6区の横断面の写真、図面を作成後、畦を除去する。併行して1区、3区の掘削、7-8区縦断面図面作成および石屋形の検出を行う。1区および4区から鉄製品が出土する。

8月26日 天気：晴

3-4区縦断面の写真撮影および土層断面図を作成後、畦を除去する。7-8区は土層断面図に注記をした後、畦を除去する。1区では石屋形の前壁石材を検出する。

8月27日 天気：晴

1・5・7区の掘削を行う。併行して3-4区横断面の写真撮影、土層断面図の作成を行う。

8月28日 天気：晴

1-8区の掘削を行う。5-6区縦断面、7-8区横断面写真撮影および土層断面図を作成する。1区から引手状鉄製品が出土する。

8月29日 天気：晴

1-2区、3-4区、7-8区縦断面の写真、図面作成および1-4区の掘削を行う。玄室からは多くの遺物が出土する。石屋形内から玉砂利を検出する。石屋形の前壁3枚の板石を使用し、外壁の2枚は袖石であり途中で折れている。

8月30日 天気：晴

3-6区の掘削を行う。羨道部は7-8区横断面の写真撮影後、断面図を作成する。午後からは石屋形内の転落石を固化した後、除去する。

8月31日 天気：晴

1-8区の掘削、石屋形内の転落石の除去を行う。3-4区縦断面の写真撮影および断面図を作成する。その後、畦を除去し4区を掘削する。

9月1日 天気：曇のち雨

1-8区の掘削を行うが、午前10時頃から降雨のため現地での作業を中止する。

9月2日 天気：晴

1-6区の掘削を行う。石屋形内玉砂利の堆積状況を確認するために前壁際にサブレンチを入れたところ、玉砂利直下から凝灰岩の板石を検出する。石屋形の底石の可能性がある。

9月3日 天気：晴

1-6区の掘削を行う。2区石屋形内玉砂利直上から金銀が出土する。

9月4日 天気：晴

1-4区の掘削を行う。玄室、羨道側壁の目地を出す。玄室内では比較的横方向の目地が通っている。床面付近は比較的小さな石材を使用している。

9月5日 天気：曇のち雨

床面直上遺物の検出状況写真撮影を行う。5-6区、7-8区横断面の清掃、写真撮影、土層断

面図作成を行う。

9月6日 天気：晴

玄室内に50cm区画で割り付けを行う。1区の左上から1A区、1B区…と設定する。

9月8日 天気：晴

床面上層遺物検出状況平面図を作成する。羨道部は5-6区、7-8区縦断面の土層断面図を作成する。石屋形内玉砂利の検出を行う。

9月9日 天気：晴

床面上層平面図を作成する。固化後、遺物を取り上げる。石屋形内では玉砂利の検出を行う。羨道部は5-6区、7-8区の縦断土層断面図を作成後、畦を除去する。7-8区横断面の写真撮影を行い、土層断面図を作成する。

9月10日 天気：晴

床面上層遺物の取り上げを行う。新た出土した土層遺物の見逃し断面図を作成する。石屋形内では玉砂利の検出を行う。羨道部では5-6区で壁面の検出、7-8区土層断面図の作成を行う。

9月11日 天気：晴

床面上層遺物の取り上げを行う。石室および羨道内で壁面の検出を行う。

9月12日 天気：晴

床面上層遺物の取り上げを行う。さらに埋土を除去すると下層から多数の遺物が出土する。1A区、3B区からは葦が被さった状態の坏が出土する。羨道部は銅環の検出を行う。

9月13日 天気：晴

石室内埋土を掘削する。馬具などの検出状況の写真撮影を行う。その後、図面に補足し取り上げる。

9月14日 天気：晴

1-4区の掘削を行う。4F区から鏡板が出土する。馬具は4区から多く出土する。

9月15日 天気：曇

1-4区の掘削を行う。1A区では床石を検出する。石屋形内は玉砂利を取り上げる。

9月16日 天気：曇

1-4区の掘削を行う。各地区より玉砂利が検出され始める。3B区から刀子が出土する。

9月17日 天気：雨のち曇

降雨のため午前中は図面整理などを行う。午後から、石室内埋土の掘削を行う。また床面直上以上の遺物の写真撮影を行い、図面を作成して取り上げる。石屋形内は玉砂利を除去する。

9月18日 天気：晴

床面直上以外の遺物を図面に記入して取り上げる。2 B区からは鉄鍬がまとまって出土する。石屋形内は玉砂利を除去する。玉砂利の中から金銀が出土する。玉砂利直下の板石は一枚岩がいくつかに割れており、底石の可能性が高い。

9月19日 天気：晴

石室内埋土の掘削を行う。床面直上以外の遺物を取り上げる。2 B区出土の鉄鍬はかなり広範囲に広がっている。

9月20日 天気：晴

石室内埋土の掘削を行う。床面直上以外の遺物を取り上げる。2 D区から鉄鍬が出土する。

9月21日 天気：晴

石室内埋土の掘削を行う。3 C、4 A区からも床面を検出する。羨道側床が若干低い。

9月22日 天気：晴

床面の検出を行う。4 D区より槍状鉄製品が出土する。また3区を中心に玉類が多数出土する。

9月23日 天気：晴

床面の検出を行う。左袖石付近の平面プランを出す。4 D区より針状鉄製品が出土する。また4 F区の石室左袖の隅から馬具が多数出土する。

9月24日 天気：晴

床面の検出を行う。石室の側壁、両袖部付近の礎床検出を行う。3 E'区の袖部付近から須恵器壺、土師器高坏などが集中して出土する。左袖部付近からは馬具が集中して出土する。

9月25日 天気：晴

床面の検出を行う。1 A'、1 C'区付近では他地区と比べて礎床の標高が低くなっている。

9月26日 天気：晴

床面の検出を行う。玄門部の壁体検出を行う。玄室内縦断面および横断面の写真撮影を行う。

9月27日 天気：曇のち雨

玄室内縦断面および横断面の再撮影を行う。その後、土層断面図の作成を行う。羨道部では5区の掘削を行う。

9月28日 天気：曇

出土遺物を取り上げを行う。3 A、3 C区にかけて床面直上よりガラス小玉が多数出土する。写真撮影を行い、図面に記入する。4 B区からは耳鏡が出土する。床面および石室上面を清掃する。

9月29日 天気：曇

床面の清掃を行った後、床面直上遺物検出状況

の写真撮影を行う。羨道部は5-6区横断面の写真撮影を行った後、図面を作成して畦を除去する。玄門部から網石が検出される。

9月30日 天気：晴

床面直上遺物の平面図を作成する。2-4区は平面図を作成した後、標高を落す。石室主軸および中軸での床石堆積状況断面図を作成する。羨道部は5-7区を掘削する。5区より10-15cmの角礫を敷きつめた面を検出する。

10月1日 天気：晴

2-4区の床面直上遺物の標高を落す。1-3区の平面図作成を行う。午後からは見透し断面図を作成する。併行して床面精査を行う。

10月2日 天気：晴

床面直上遺物の取り上げを行う。併行して遺物の見透し断面図を作成する。

10月3日 天気：晴

床面の検出作業を行う。右袖付近から土師器高坏や須恵器横瓶、盃などがまとまって出土する。高坏の上に横瓶の破片がのっており、片付け行為によるものと思われる。

10月4日 天気：晴

午前中、床面および壁体の清掃を行う。午後より石室完掘状況の写真撮影を行う。

10月7日 天気：晴

石室の平面プラン実測図を作成する。羨道部および6区を掘削する。7-8区の縦断面の写真撮影、図面作成を行う。

10月8日 天気：曇

本日菊神社の祭礼が開催されるため、境内や周辺の清掃を行う。午後、祭礼が行われる。地元の方の要望で急遽古墳の説明を行う。その後、壁面清掃を行いながら、石室の割り付けを行う。羨道部は8区を掘削する。

10月9日 天気：曇のち晴

石室の割り付けを行う。併行して玄室、羨道壁面の清掃を行う。

10月10日 天気：晴

石室の割り付けおよび床面の実測を行う。羨道部は7-8区横断面の写真撮影、断面図作成を行った後、畦を除去する。

10月11日 天気：晴

石室の割り付けを行う。石室上面の平面図を作成する。併行して床面の補足実測を行う。4区から出土した坏の中に玉砂利が入っており、追葬に

際して曝を敷き直した可能性がある。

10月12日 天気：晴  
石室の割り付けと石室上面図の作成を行う。

10月15日 天気：晴  
石室の割り付けと石室上面図の作成を行う。

10月16日 天気：晴  
石室の割り付けと石室上面図の作成を行う。玉砂利の追加実測を行う。

10月17日 天気：晴のち曇  
石室上面図を作成する。羨道部石室実測に向けて壁体の清掃を行う。

10月18日 天気：晴  
石室上面図の作成を行う。石室の立面断面図を作成する。羨道部は畦を設けて掘削する。

10月19日 天気：晴  
石室主軸断面図作成後、玄室の立面断面図を作成する。石室壁体の清掃を行う。

10月20日 天気：雨  
玄室の立面断面図を作成する。床面の補足実測を行う。羨道部は壁体の清掃を行う。

10月21日 天気：雨  
玄室の立面断面図を作成する。床面の補足実測を行う。羨道部は壁体の清掃を行う。

10月22日 天気：雨  
玄室の立面断面図を作成する。中軸から奥壁側の見越し断面図を作成する。

10月23日 天気：曇のち晴  
玄室の立面断面図を作成する。中軸から奥壁および羨道側の見越し断面図を作成する。羨道部は床面の清掃を行う。

10月24日 天気：晴  
玄室の立面断面図を作成する。玄室中央から奥壁および羨道側の見越し断面図を作成する。羨道部は礫検出状況の平面図を作成する。

10月25日 天気：晴  
羨道の礫検出状況平面図を作成する。玄室、中軸から奥壁および羨道側の見越し立面図を作成する。

10月26日 天気：晴  
玄室の立面断面図を作成する。奥壁の見越し断

面図を作成する。羨道の礫検出状況平面図を作成する。羨道左側壁の立面断面図を作成する。

10月27日 天気：曇のち晴  
玄室、羨道の立面断面図を作成する。玄室床面遺物を補足実測する。

10月28日 天気：晴  
玄室の立面断面図を作成する。羨道の立面断面図を作成する。

10月29日 天気：晴時々曇  
羨道の立面断面図を作成する。

10月30日 天気：晴  
羨道の立面断面図を作成する。石彫形の平面図を作成する。

10月31日 天気：晴  
石彫形の平面図を作成する。玉砂利の断面図を補足する。羨道の立面断面図を作成する。

11月1日 天気：晴  
羨道の立面断面図を作成する。石室内の清掃を行う。事務所にて現地説明会の資料作成を行う。

11月2日 天気：晴  
地元住民対象の現地説明会を開催する。約40名の参加。現地説明会終了後、羨道礫の検出状況の写真撮影を行う。

11月5日 天気：晴のち曇  
玄室、羨道にサブレンチを掘削する。

11月6日 天気：曇  
玄室、羨道のサブレンチを掘削する。写真撮影を行った後、土層断面図を作成する。遺構保護用の屋根を製作する。

11月7日 天気：晴  
玄室、羨道のサブレンチの土層断面図を作成する。遺構保護用の屋根を製作する。

11月12日 天気：晴  
石室上面図を補足する。

11月27日 天気：晴  
玄門部見越し断面図を補足する。

11月28日 天気：晴  
玄門部見越し断面図を補足する。作業用具の片付けを行う。本日にて現地での作業を終了する。

### 第3節 古墳の立地

菊塚古墳は善通寺市街地から南西側に広がる通称瓦谷と呼ばれる地域に位置する。この地域は有岡地区とも呼ばれており、低丘陵地帯が広がっている。有岡大池を水源とする弘田川上流域に該当し、多くの首長墳級の前方後円墳が集中する地域として著名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡があまり検出されない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、墳墓などが多く見つかっている。

この地域は北側から西側にかけて、五岳山の一角である香色山（標高153.2m）、筆ノ山（標高296.0m）、我拝師山（標高481.0m）が連なっている。南側は丸亀平野の独立峰では最も高い大麻山（標高616.3m）の裾野が広がっており、西側の平野方向のみが開ける地形となっている。これらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、また標高50～80mの山裾部には、後期から終末期の群集墳が密集している。平野部にも舌状に伸びる小丘陵が点在しており、その地形を利用して多数の古墳が築造されている。

菊塚古墳は、これらの平野部に広がる古墳のうち最も西側の平地に独立して築造されている。古墳は開墾や住宅建設に伴い前方部は大部分が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが辛うじて残存しているに過ぎない。その後円部さえも周囲は大きく崖状に削平されるなど地形の変更が著しい。一方、岡場整備前の航空写真を観察すると、古墳の周囲には周庭帯の痕跡と推定される平面楕円の地割りが認められる。この部分は墳丘南側では西から東にかけて階段状に低くなっており、その比高差は0.7mを測る。墳丘の主軸は南西～北東方向を向いている。

墳丘の全長は推定で約59m、後円部直径約39m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、丸亀平野でも屈指の規模を誇る。

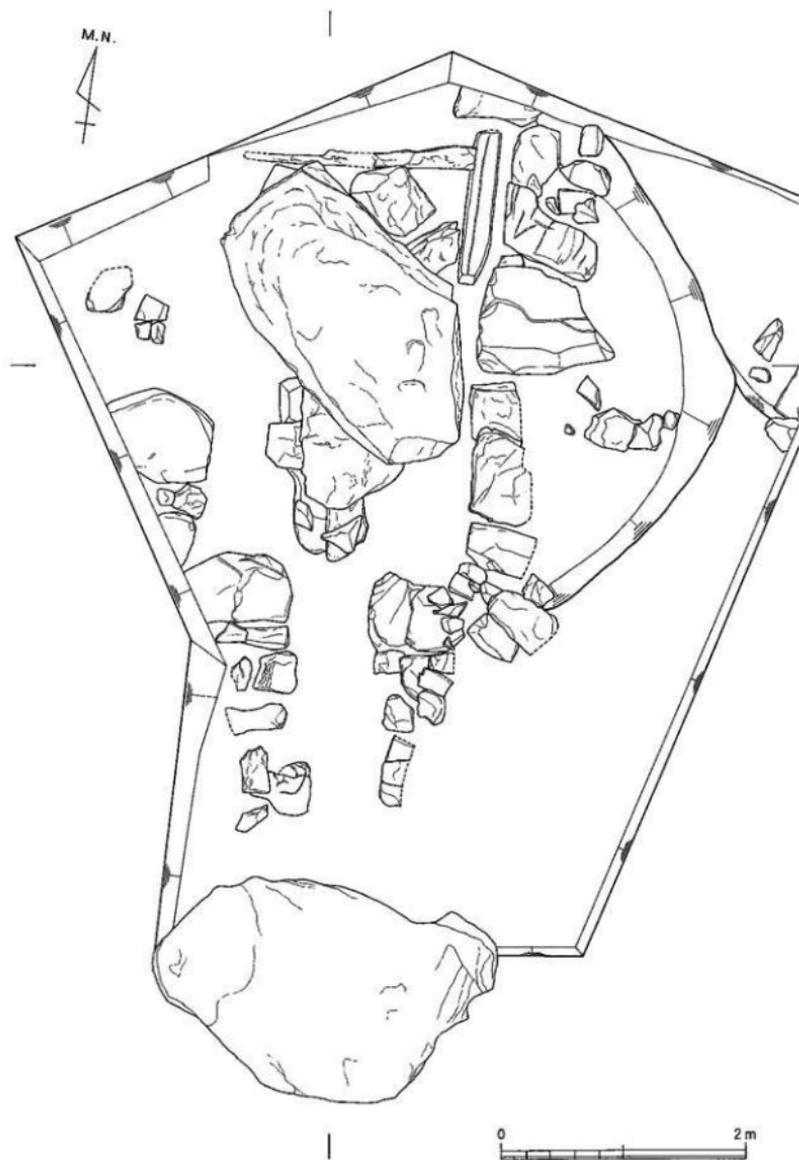
### 第4節 石室検出状況

昨年度の調査において横穴式石室が埋没していることが確認されたため、まず昨年度の調査区への再掘削を行った。その後、石室の開口方向が確定できた時点で調査区を拡張した。天井石で原位置を保っているものはなかったため、崩落石や埋土を上部より除去していった。その結果、ほぼ南北に主軸をもち南に開口する有軸式の横穴式石室であることが判明した（第8図）。

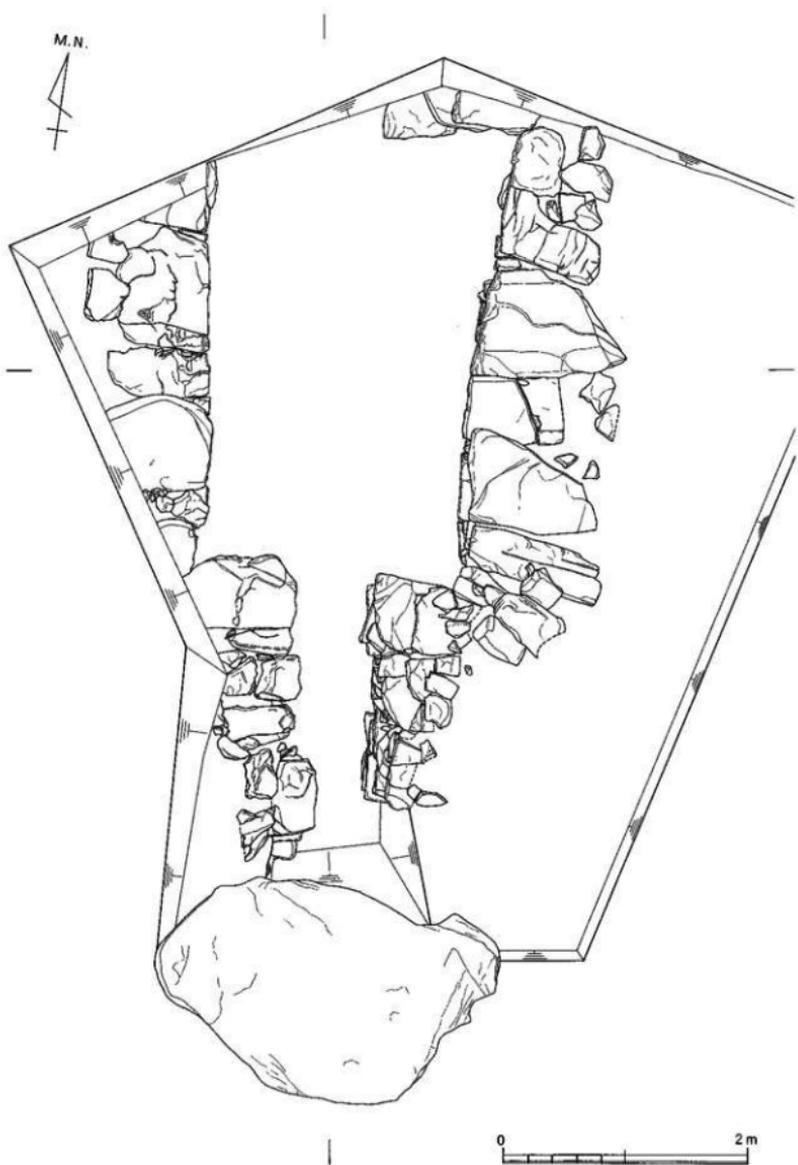
支室北半部には、石室内に転落した天井石が1石残存していた。この天井石は石室の主軸に対して斜めになっており、また残存している岡壁とほぼ同じ高さであった。支室幅よりも天井石の長さが短いことなどからも明らかに原位置は保っていない。天井石の下部には流入土が厚く堆積しており、石室構築のしばらく経った後、天井が崩落したと考える。天井石の転落（移動）を石室の崩壊と結びつけて考えると、石室内流入土は石室崩壊以前の堆積土と崩壊後の堆積土に大別することができる（第19図）。

支室内へは、検出段階でこの天井石以外にも一辺5cm程度から一辺1m以上を測る多数の礫が投入されていた。これらは、壁体を構成していた石材と推定する。羨道内には比較的小型の礫が投入されていたが、羨道部は上部に攪乱坑が穿たれていたため、人為的に投入された礫も多数あったと思われる。





第8図 石室検出状況図 (1:40)



第9図 石室上面図 (1:40)

## 第5節 羨道

羨道は玄門から開口部側1.6～2.7mまでは壁体が残存していたが、それより羨門側は攪乱を受けており両側とも全く残存していなかった（第10図）。幅はほぼ一定であり、残存している羨道の中央部分で0.95m、高さは床面から最も残存していた部分で約1.8mを測る。壁体の傾きは、右側壁が崩落寸前まで内側にせり出しているのに対し、左側壁は基底石から上部へ上るほど外側（墳丘側）に石材が入り込んでいた（第11図）。この歪みは築造当初からのものではなく、後世の攪乱や改変によるものと考えられる。なお、原位置を保つ天井石はなかった。

**右側羨道** 基底石は計3石残存していた。玄門からの長さは2.7mを測る。高さは最も残存している部分で1.7mを測る。基底石は全て最大面を設置面として横位に据えられていた。基底石間の隙間には小石材が充填されていた。基底石上面の高さは、最も開口部側のもので標高43.2m、他の2石は標高42.9mを測る。右側壁全体を観察した場合、目地が通る箇所は、開口部側の基底石上面、すなわち他の壁体の2段目上面である標高43.2mで確認できる。壁体の目地は他に玄門袖石の2段目上面に対応する標高43.4m、玄門袖石の3段目上面に対応する標高43.65mの3箇所確認できる。

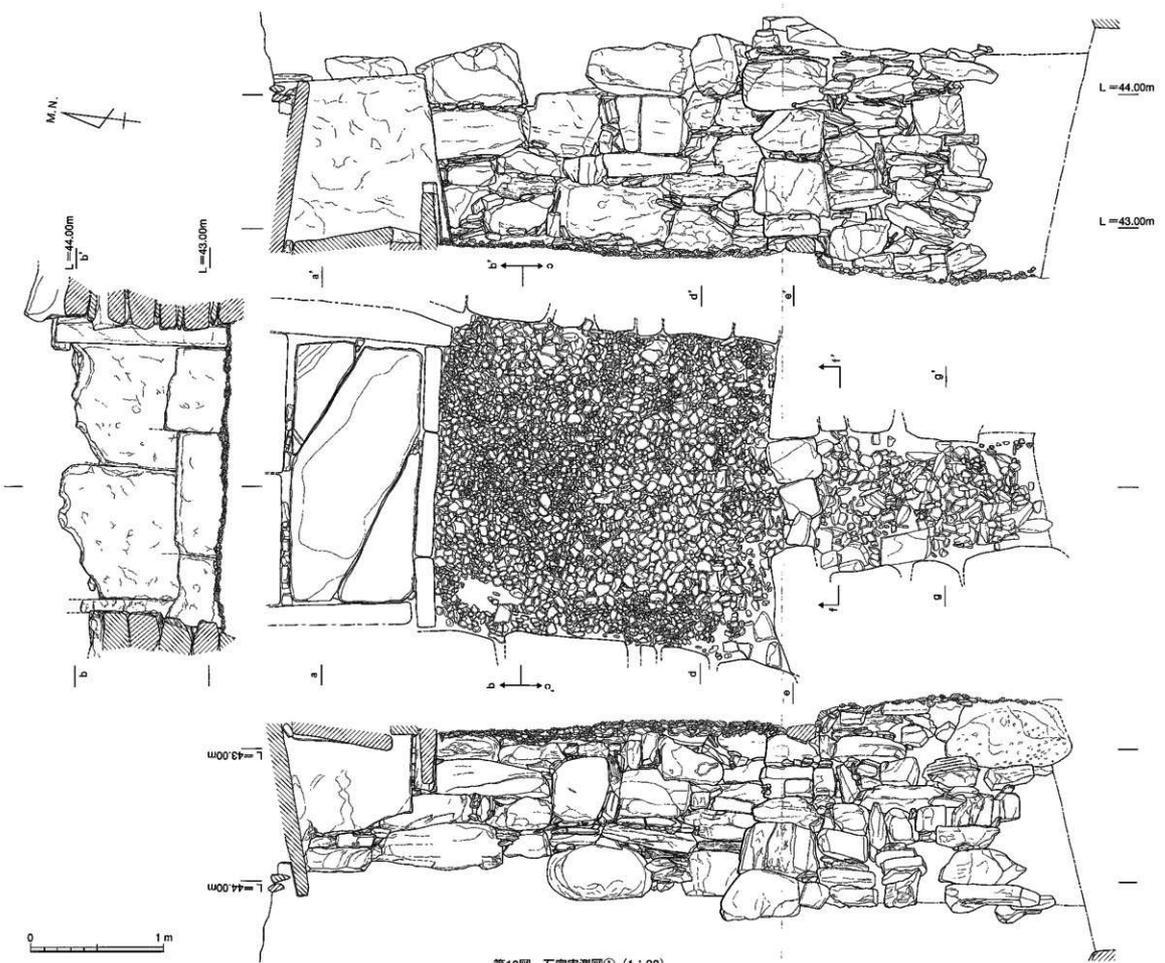
壁体は大部分が最大面を設置面とする横位に用いられているが、2段目および3段目の一部の石材に壁体間を充填するように縦位に用いられている。石材は基底石が長辺0.6m～1.0m前後の比較的大振りな石材を使用している。同様な石材は上部にも用いているが、長辺0.4m前後の石材を下部にも用いており、意図的な石材選択はなされていない。材質は最も開口部側の基底石が凝灰角礫岩である他は、全て安山岩である（第13図）。

壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段まで確認できた箇所はいずれも玄門側から羨門側に積まれており、玄門袖石を基準にして羨門側に向かって壁体を構築したと考える。壁体間には隙間が多く認められるが、本来から隙間があったというよりも石室内の攪乱や壁体が内側に膨らんできたために生じたものと推測する。

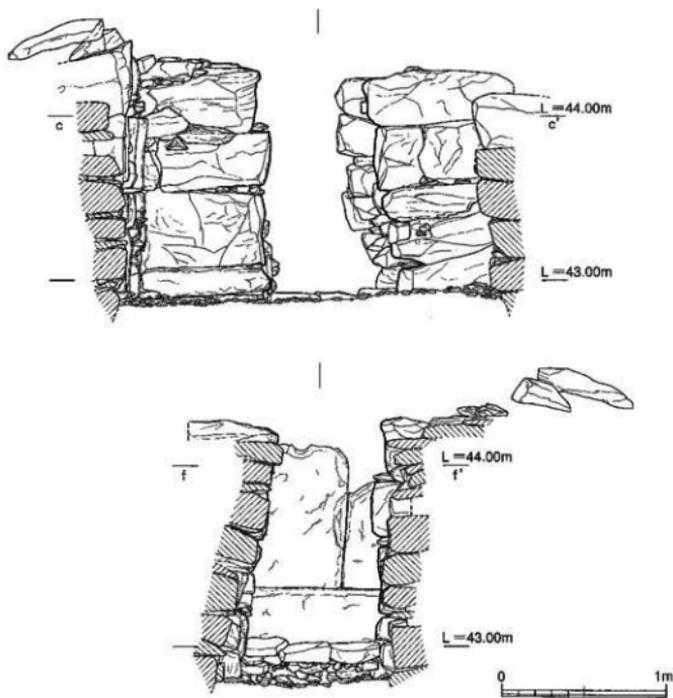
**左側羨道** 基底石は計3石残存していた。玄門からの長さは1.6mを測る。高さは最も残存している部分で1.8mを測る。基底石は全て最大面を設置面として横位に据えられていた。基底石上面の高さは標高42.8mを測り、右側羨道よりも低い。左側壁全体を観察した場合、目地が通る箇所は、壁体の全体が歪んでいるため基底石上面以外では、標高43.4mと標高43.7mの2箇所のみである。その2箇所はともに玄門袖石の目地とは対応しておらず、右側壁とは様相が異なる。材質は全て安山岩である（第13図）。

壁体は大部分が最大面を設置面とする横位に用いられているが、一部の石材は壁体間を充填するように縦位に用いられている。石材は基底石が長辺0.4m前後と比較的小振りな石材を使用している。上部には長辺0.7m前後の大振りな石材もあり、意図的な石材選択はなされていない。

壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段まで確認できた箇所はいずれも玄門側から羨門側に積まれており、玄門袖石を基準にして羨門側に向かって壁体を構築したと考える。壁体間には隙間が多く認められるが、右側壁と同様の理由が想定できる。



第10图 石室实测图① (1:30)

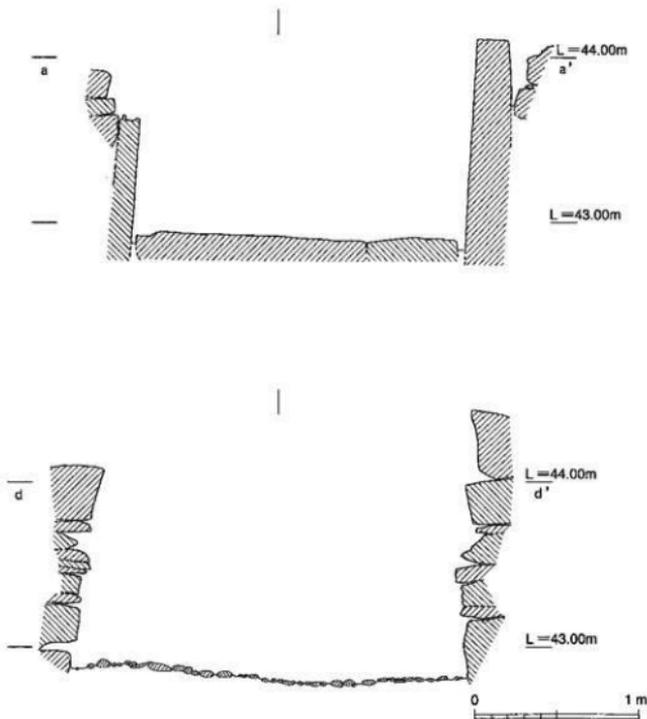


第11図 石室実測図② (1:30)

## 第6節 玄門

玄門部は奥壁より約4.0m南側に位置している(第10図)。玄門を構成する石材は比較的大振りな石材で構成されており、意図的な選択がなされている。右側袖部の基底石と左側袖部の2段目、右側袖部の2段目と左側袖部の3段目、右側袖部の3段目と左側袖部の4段目の石材上面の標高がほぼ一致しており、左右のバランスを意識しながら構築したと考える。平面的には左右ともに袖部を境にして羨道部が狭まっており、両袖式の横穴式石室といえる。また羨道側から見た場合、袖部が若干内側に突出しており(第11図)、王墓山古墳との関連を指摘できる。

**右袖石** 袖石は計5石残存していた。いずれの石材も最大面を設置面とする横位に用いられている。基底石が大きな石材を用いたという訳ではなく、立柱石のように特に意識されたとはいえない。右側袖部は残存高1.4m、幅0.6mを測る。いずれの石材も平滑な部分を選択し壁面としている。袖石は上部にいくほど北側(玄室側)に内傾しているが、本来は垂直であったと推測する。材質は最上部の1石が閃緑岩である他は、すべて安山岩である(第13図)。



第12図 石室横断面図 (1:30)

**左袖石** 袖石は計5石残存していた。いずれの石材も最大面を設置面とする横位に用いられている。基底石が大きな石材を用いたという訳ではなく、特に意識されたとはいえない。むしろ左側袖石の中で基底石が長辺0.4mと最も小振りの石材を使用している。左側袖部は残存高1.45m、幅0.7mを測る。いずれの石材も平滑な部分を選択し壁面としている。袖石は上部にいくほど北側(玄室側)に内傾しているが、本来は垂直であったと推測する。材質は全て安山岩である(第13図)。

## 第7節 玄室

玄室は左右両壁とも上部が崩落していたが、床面より最高1.7mまで残存していた。原位置を保つ天井石はなかった。なお奥壁側から1.6mまでは、石罫形の側壁があるため、形状などの詳細は不明である。

右側壁 基底石は6石以上で構成されている。奥壁から玄門部までの長さは3.95mを測る。床面からの残存高は最も高い玄室中軸より南側0.4m付近で1.3m、中軸付近で1.0mを測る。壁体は最も残存している部分で5段積みである。基底石はその全てが最大面を設置面として横位に据えられている。基底石間の隙間には小石材が充填されている。基底石上面の高さは、概ね43.15mに揃えられている。この高さは玄門基底石とほぼ一致する。壁体の目地は他に玄門袖石の3段目に対応する標高43.6mで確認でき、羨道部と同時に構築したと推測する。壁体はほぼ全てが最大面を設置面とする横位に使用されているが、壁体間の隙間を充填する小石材は縦位に据えられているものも多い。

石材は基底石では比較的大振りな長辺0.5m～0.7m前後のものを用いてはいるが、上部にもそれを凌ぐような大型の石材を使用しており、特に意識的な選択がなされたとは考えにくい。石材は概ね長辺0.7m～1.0mの大型のもの、長辺0.3m～0.5mの小型のもの、壁体間を充填する小石材に大別できる。材質は全て安山岩である（第13図）。

壁体の重複関係を見てみると、基底石から上段までいずれも奥壁側から羨道側に積まれており、奥壁を基準にして玄門に向かって壁体を構築したことは明らかである。玄門から北へ0.3mまでの壁体は他の玄室石材と比較して明らかに小振りな石材を用いており、奥壁および玄門を先に構築した後、奥壁側から順に積んでいき、玄門北側で比較的小型の石材をはめ込んで石室を構築したと考える。

左側壁 基底石は6石以上で構成されている。奥壁から玄門部までの長さは3.95mを測る。床面からの残存高は最も高い玄室中軸より南側1.4m付近で1.6m、中軸で1.2mを測る。壁体は最も残存している部分で5段積みである。基底石はその全てが最大面を設置面として横位に据えられている。基底石間の隙間には小石材が充填されている。

基底石上面の高さは、標高42.95mに揃えられている。この高さは玄門基底石とほぼ一致する。壁体の目地は、他に玄門袖石の3段目半ばに当たる標高43.4mで確認できる。基底石は大部分が床面より0.1m上部になる程度で、実質的な基底部はこの目地が通る標高が該当すると考える。この目地は、前述の左側羨道部の目地の通る標高と一致する。おそらく玄室と羨道は高さを揃えながら同時に構築していったのであろう。壁体はほぼ全てが最大面を設置面とする横位に使用されているが、壁体間の隙間を充填する小石材は縦位に据えられているものもある。

石材は基底石に長辺0.3m～0.5mの小振りな石材が多く使用される反面、2段目より上部には大型の石材を使用しており、特に意識的な選択がなされたとは考えにくい。石材は概ね長辺0.7m～1.0mの大型のもの、長辺0.3m～0.5mの小型のもの、壁体間を充填する小石材に大別できる。材質は玄室中軸より0.6m南側にある2段目の石材が凝灰角礫岩である以外は、全て安山岩である（第13図）。

壁体の重複関係を見てみると、基底石から上段までいずれも奥壁側から羨道側に積まれており、奥壁を基準にして玄門に向かって壁体を構築したことは明らかである。玄門から北へ0.3mまでの壁体は他の玄室石材と比較して明らかに小振りな石材を用いており、奥壁および玄門を先に構築した後、奥壁側から順に積んでいき、玄門北側で比較的小型の石材をはめ込んで石室を構築したと考える。

## 第8節 奥壁

奥壁は大部分が調査区外になることや、石屋形の奥壁によって遮られているため、大部分を確認することが出来ない。僅かに玄室左側壁に接している1石と、石屋形の北側で一部を検出した1石の計2石が確認できるのみである(第10図)。他の未確認石材も石屋形背面に位置するものについては、残存していると考えられる。検出した2石は標高44.0m~44.2m付近であり、側壁の4~5段目に相当する。確認できた石材はいずれも長辺0.3m~0.5mの比較的小振りではあるが、奥壁の上段に位置するため妥当な大きさといえる。2石とも最大面を設置面として横位に据えられていた。材質はいずれも安山岩である(第13図)。

## 第9節 天井

天井石と推測する石材は計2石検出した(第8図)。この内の1石は、調査区の最も南側で調査前から露出していたものである。もう1石は玄室内中央部に落ち込んでいた。いずれも出土状態から明らかに原位置を保っていない。2石は玄室内転落石が長辺2.6m、短辺1.4m、羨道上の石材が長辺2.8m、短辺1.8mを測る。玄室内石材の除去は、長年造園業を営む太田文雄氏にご協力を賜ったが、氏の言によると、いずれの石材も2tは下らないとのことである。いずれも石材の規模から玄室の天井石と推定する。他に石室内から天井石と推測する石材は、検出出来なかった。これらの石材以外にも墳丘上には、天井石と推測する石材が数個散乱している。

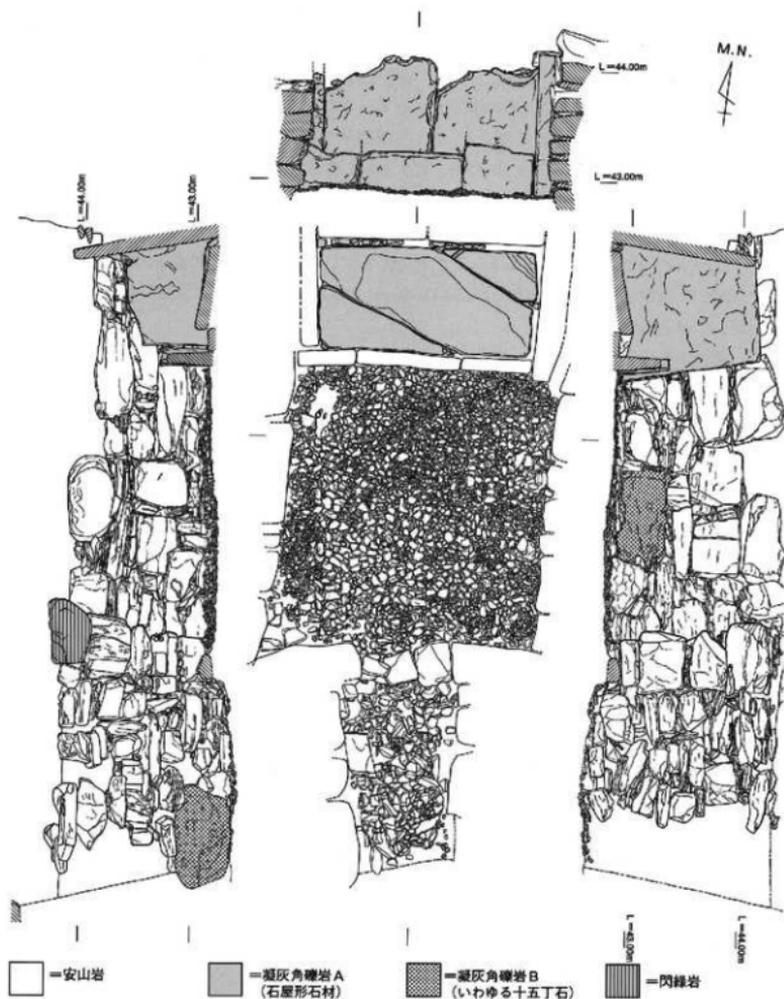
## 第10節 石屋形

石屋形は屋根材が調査時には残存していなかったが、石屋形内および玄室内に屋根材と思われる石材が多数落ち込んでいた。石屋形側壁2石、奥壁2石、底石3石、袖石2石、框石1石が原位置を保っていた。すべて凝灰角礫岩の板石が使用されており、表面には工具痕が残る。

石屋形は石室プランにはほぼ沿う状態で奥壁側に設置されており、石屋形側壁から石室側壁までの距離は検出面で両側とも5cm前後である。なお、石室奥壁と石屋形奥壁の床面での距離は今回の調査では未確認だが、一部検出した石室奥壁と石屋形奥壁の状況から推定すると側壁と同様、間隔はかなり近接していたと想定する。

屋根材は調査時には既に失われていたが、石屋形内や玄室内からその破片と思われる石材を多数検出した。破片はその殆どが幅0.1~0.15mほどの板石であり、石屋形側壁、奥壁の上に1枚の板石が横架されていたと推測する。

石屋形の左側壁は完存するが、右側壁は石屋形の底石から0.71mを残して上部を欠損している。石屋形右側壁の上面は、長さ0.95m以上、最大幅0.16m、最小幅0.11mを測る。床面での長さ、幅は今回の調査では明らかにすることが出来なかった。石屋形左側壁における床面からの高さ1.23m、上面での長さ1.16m、最大幅0.19m、最小幅0.16mを測る。床面では1.4m以上、最大幅0.26m、最小幅0.15mを測る。石屋形左側壁上面ほぼ中央には、長さ1.16m、幅0.01m、深さ0.01mの断面



第13図 石室石材同定図

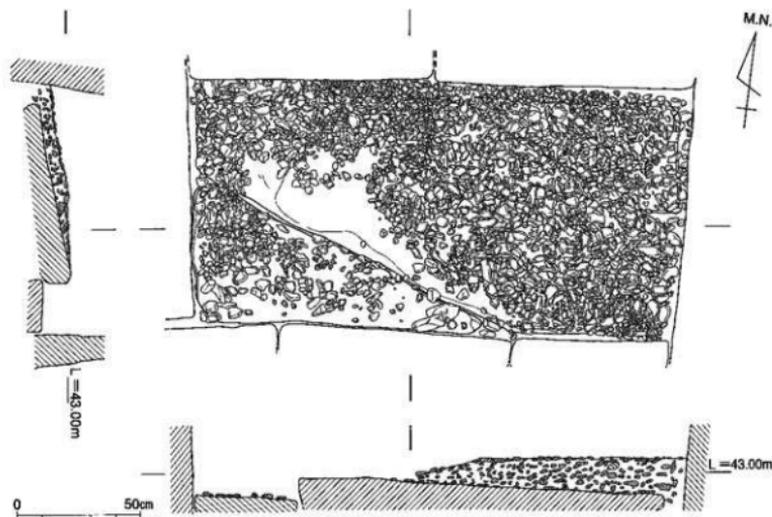
U字状のごく浅い掘り込みが1条認められる。おそらく屋根材架構に伴うものであろう。

石屋形奥壁は、2材を組み合わせで構成されている。奥壁上面は一部残存している面を残す、そのほとんどが欠損している。残存部分での床面からの高さは1.22m、上面での幅0.16mを測る。石屋形奥壁の床面での幅は不明である。石屋形奥壁は2材とも南側に約10度後道方向に内傾している。おそらく石室上部の崩壊後、土圧により後道方向へ傾いたものと思われる。

石屋形袖石は框石を挟む2枚の板石からなる。2材とも下側3分の1ほど残して欠損している。本来は石屋形屋根材まで伸びていたものと思われる。右側袖石は上面での長さ0.52m、幅0.13mを測り、床面での長さは0.53m、幅0.14mを測る。左側袖石は上面での長さ0.61m、幅0.1mを測り、床面では長さ0.64m、幅0.14mを測る。右側袖石は石屋形右側壁の小口部と接しているが、左側袖石は左側壁の長辺側につく。

框石は2枚の石屋形袖石に挟まれる形で設置されており、床面からの高さ0.37m、上面での長さ0.92m、幅0.1mを測り、床面での長さは0.94m、幅0.14mを測る。上面に若干の欠損部分があるが、ほぼ完存する。

底石は3枚の板石からなる。3材とも表面を平滑に仕上げている。厚さは計測できず不明であるが、少なくとも0.2m以上を測る。それぞれのレベルは異なり、一番西側の石材が最もレベルが低い。中央の石材は西側と南側が高く、それぞれ東、北に行くに連れて低くなる。3材はそれぞれの割れ目が合致するため元来、1枚の板石であった可能性も否定できない。1枚板と仮定すると、長辺側1.97m、短辺側0.95mを測る。また底石と石屋形奥壁との隙間には掘りこぼし大の



第14図 石屋形内玉砂利実測図 (1:20)

石材を充填していた。この石材は、他の石屋形を構成する石材と同質の凝灰角礫岩である。底石の上には玉砂利が敷かれていたが、玉砂利の密度は場所によって差異があり、底石の東側に厚く堆積していた。玉砂利直上および玉砂利内から耳鎖・勾玉・ビーズ玉など多数の装身具が出土した。

石屋形のあり方は、玉塚山古墳のものと比較すると、奥壁に接して裾えられており、肥後地方などで見られる通有のタイプと同じ位置にあり、より標準的な形態といえる。その中で特徴的なことは側壁と袖石との関係である。袖石は右側では石屋形右側壁小口部に接するが、左側では石屋形左側壁の長辺側につく。この様なびつな組み合わせ方は、石室玄室幅に制約を受けたためと思われる。

## 第11節 平面プラン

石室は単室構造である(第10図)。石室主軸は磁北より7度30分東偏し、南南西方向に開口する。

石室の平面プランは、奥壁側の幅(石屋形のすぐ南側)、中軸幅、玄門幅を比較すると、2.46m、2.32m、2.43mとなり、若干中軸付近が狭いものの、ほぼ直線的になる。玄室最大幅は2.46mを測る。羨道部の途中から調査区外になるため、全体の長さは判然とはしないが、現状で確認できる石室残存長は主軸上で6.09mを測り、この内、玄室長は3.84m、羨道長は2.55mを測る。主軸・中軸における玄室長と幅の比率は約1.66:1である。

玄室の平面プランで特筆すべきことは、玄門部のあり方である(第10図)。通常、玄室の平面プラン四隅の角度は直角もしくは鋭角になる例が大多数であるが、菊塚古墳のプランを見てみると玄門側の2箇所の隅の角度が、いずれも鋭角(南東隅約88°・南西隅約79°)になる。この角度は上段になるにつれ徐々に直角に近くはなるが、鈍角になることはない。また、玄室の平面プランを検討すると、石室主軸・中軸に対して全体的に北東-南西方向に斜めに歪んでいることがわかる。このような歪んだ平面プランの事例は、管見による限り類例はない。いずれの事例もその形状が本来のものなのか、後世の攪乱や改変に伴うものなのかについては、現時点で判断することは出来ない。今後の調査に期待したい。

袖部は石材を縦位に据える立柱構造は採用せず、形状、大きさとも特に意識的に選択している印象は受けない。袖部間の幅は0.80mを測る。この数値は後述の羨道幅と比較してみると、約0.15mの開きがあり、内側に袖部が突出していることが平面プランからも把握できる。

羨道は調査で確認した長さは2.25mを測るが、調査区外にも伸びると推測する。現在の墳丘上段斜面に開口すると仮定すると、墓道および羨道長は約5.50mとなる。ただし調査区南端部は攪乱を受けており、全体は全く確認できなかった。そのため今回の調査では、調査区外まで羨道が伸びるかどうかについては確認できなかった(第10・19図)。

## 第12節 床面

玄室床石は部分的に粗密があるものの、ほぼ全域を覆っている(第10図)。いずれも川原石と推測される円礫を用いている。床石の礫の規模を細かく観察すると、直径5cm前後の細かな礫を

無秩序に撒く箇所と、直径10cm前後のやや大きめの礫を規則的に配置する箇所と大別される。玉類などの副葬品の配置と併せて考えてみると、石屋形外に数回の追葬が想定できるが、各地区毎の出土遺物の数量が確定できていないため、詳細な検討は今後の課題としたい(第15・16図)。

なお、下層の状況を確認するため、玄室中軸部分および羨道中央部分にサブトレンチを設定し掘削したが、薄い置土層の下には墳丘盛土の一部である版築土層や両側壁の掘え付け穴を検出した。よって下層に床面はないと判断した。

羨道内にも礫が敷かれていたが、直径10cm前後と玄室よりも大振りなものが多く、形状も角張っているものが多く、玄室の床石とは様相が異なる。また密度も両側壁に接する部分には礫がまばらであることや、床面のレベルが玄室と比較して約0.1~0.15m低いことなど相違点も多く認められる。土層断面図を見てみると、礫が上部でも検出していることが確認でき、床面まで攪乱されていたことが予想できる。以上のことから羨道部の礫については、床面か否かについては確定できなかった。可能性としては、①不整ながらも床面である。②床面が攪乱を受けた結果である。③床面はさらに上層にあり、攪乱されたためすべて消滅していた、の3通りの解釈が想定できる。今後の羨門部や墓道の調査結果をもって判断したい。なお、石屋形内の玉砂利については第10節を参照されたい。

### 第13節 遺物出土状況

石室内からは、須恵器・土師器・馬具・鉄製品・玉類など多数の遺物が出土した(第15~18図・第1表)。各々の遺物のうち、床面直上の遺物のみが原位置を保っていると考えられる。遺物の出土位置は石室内埋土、床面上層(再利用面)、床面直上の3つに大別できる。遺物個々の詳細な説明は別節に稿を譲り、遺物の出土状況についてのみ記す。なお、第16・18図には、須恵器坏および高坏のみ図示した。

石室内埋土からは須恵器片や土師器片、鉄片などが玄室内から出土したが数量はごく僅かである。須恵器は細片のみである。他に土師質の鍋や羽釜、瓦質土器、瓦などが出土した。これらの遺物は後述の通り、床面上層からも出土している。鉄器類は馬具片(引手金具)や鉄鏃などが出土したが量は少ない。他に特徴的なものとして不明鉄製品がある。浅い碗状を呈する鉄地金銅張りの遺物で中心にごく小さな穿孔がある。これらの遺物はいずれも後世の攪乱によって混入したと考える。瓦は全て近世の平・丸瓦である。昨年度報告した軒丸瓦と同様、17~18世紀のものと考える。羨道内からは須恵器の細片が出土したのみである。

床面より上層約0.15~0.2mから多数の須恵器片や土師器片、玉類などが出土した(第15・16図)。玉類は一部原位置を保っていると考えられるものもあるが、土器類は下層の床面直上遺物と接合するものもあり、原位置を保っているとは考えにくい。この面から黒色土器や少量の炭化物を検出したことから、後世の再利用面と判断した。

遺物の整理作業が完了していないため本報告では図示することが出来なかったが、この面では壁体の目地に挿入された裝飾付台付壺の破片(鹿の胴部)や、故意に破砕したと推定する須恵器甕などを確認した。

床面からは、多数の遺物が出土した(第17・18図)。これらの内、大部分の遺物は原位置を保つ

ていると考える。床面遺物は玄室北東側の鉄鏝、東側の須恵器杯(9~14)、南東側の馬具・鉄製品、北西側の須恵器杯(1・2・15~18・22)、南西側の須恵器(3~8・21・23・36)・土師器に大別される。玄室中央部には大型の遺物がほとんどなく、玉類が比較的まとまって出土する。これらの遺物で特徴的なものに、須恵器杯(11・12)があげられる。この杯の内部に金銀が1個、杯の下にさらに金銀が1個置かれていた。この金銀は対をなしている。また玄室北西側の土師器塔の内部から土製丸玉35点が出土した。おそらく一連に束ねられた上で入れられていたのであろう。いずれの事例も葬送儀礼を理解する上で、非常に興味深い出土状況といえる。棺体配置や片付け行為の復元など検討すべき課題は多いが、遺物の整理作業が完了した時点で改めて考えてみたい。

## 第14節 石室埋土土層

石室上部の崩壊に伴い、石室内部は流入土が堆積していた(第19図)。石室埋土の層位は、近現代の攪乱層である第I層(第①~⑦・⑫~⑯層)、玄室天井石崩落に伴う第II層(第⑧~⑩・⑳・㉑層)、羨道部上層からの流入土(上層と下層に大別できる)である第III層(第⑪~⑮・㉒層)、第IV層(第⑲~㉔・㉕・㉖層)、石室の再利用層である第V層(第⑯・㉗・㉘層)、床面直上の堆積層である第VI層(第㉙・㉚・㉛・㉜層)、床面下層の盛土層および石室裾え付け穴である第VII層(第㉝~㉞・㉟・㊱・㊲層)に大別される。以下、上層より詳述する。

第I層は攪乱坑である。すでに昨年度の調査で数次にわたっての盗掘を受けていることが判明しており、これに対応するものである。

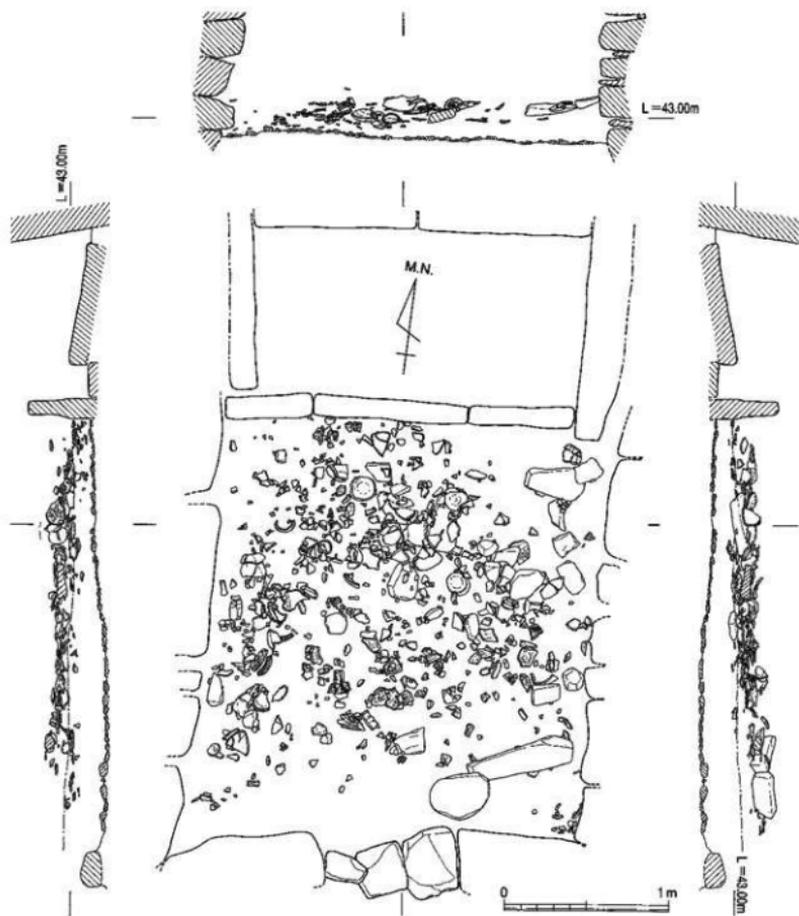
第II層は石室上部の崩壊に伴う流入土である。石室内に厚く堆積しており、石室の部材を多く含む。この層から須恵器台付長頸壺の脚部が出土している。この破片と接合関係を持つ資料は見つかっておらず、石室内から持ち出されたものであるのか、埴丘祭祀などに利用されたものであるのかは不明である。

第III・IV層は石室崩壊以前に堆積した層である。上層断面から羨道部側より玄室側に土が堆積していった様子が看取できる。第⑯層は石屋形の破片である凝灰岩を多く含む。これより下層からは凝灰岩は検出されないことから、石屋形が破損したのはこの時期と想定される。この層はほとんど遺物を含まないため、石屋形が破損した時期を特定するのは困難であるが、これより下層から黒色土器が出土していることから、少なくとも中世以降であるのは明らかである。

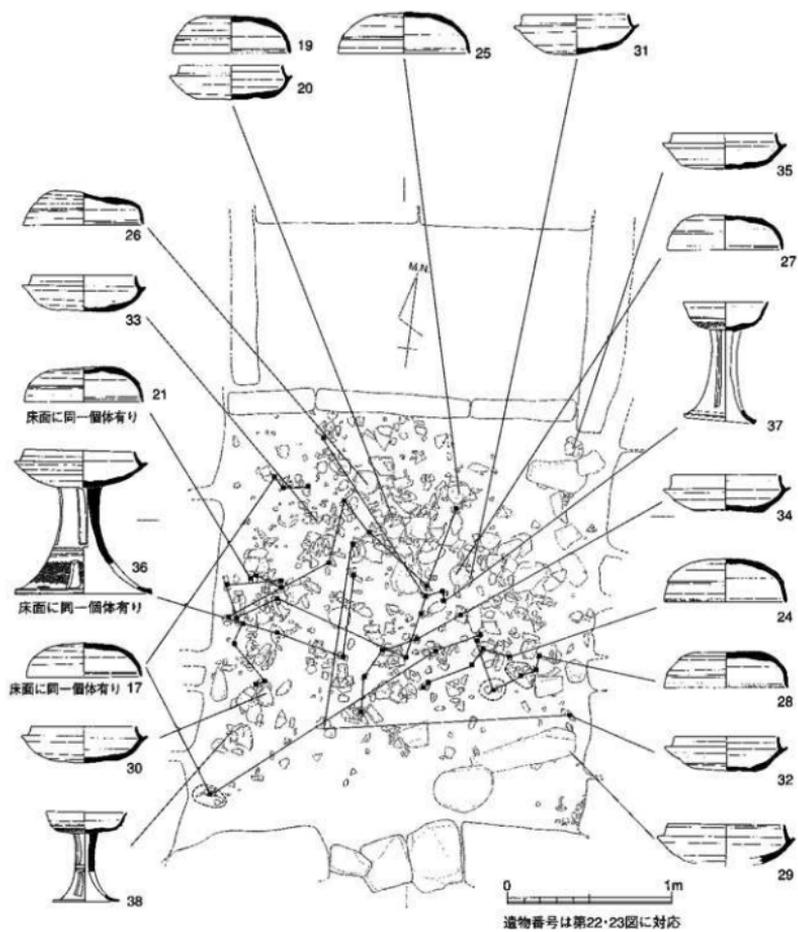
第V層は黒色土器、炭化物を含む上層である。このことから後世における石室の再利用が想定できる。同一面上には多量の須恵器や土師器、馬具などが一面に散乱しており、当時、流入土によって完全に埋没していなかった古墳に伴う遺物が二次的移動を受けた結果と考えられる。

床面直上の堆積層である第VI層は、古墳に伴う多数の遺物を包含する。これらの遺物は、後世の再利用時には完全に埋没しており、攪乱を免れたものと思われる。遺物の残存状況は良好であり、最終埋葬時の状態のものと、それ以前の片付け行為によるものとに分類できる。

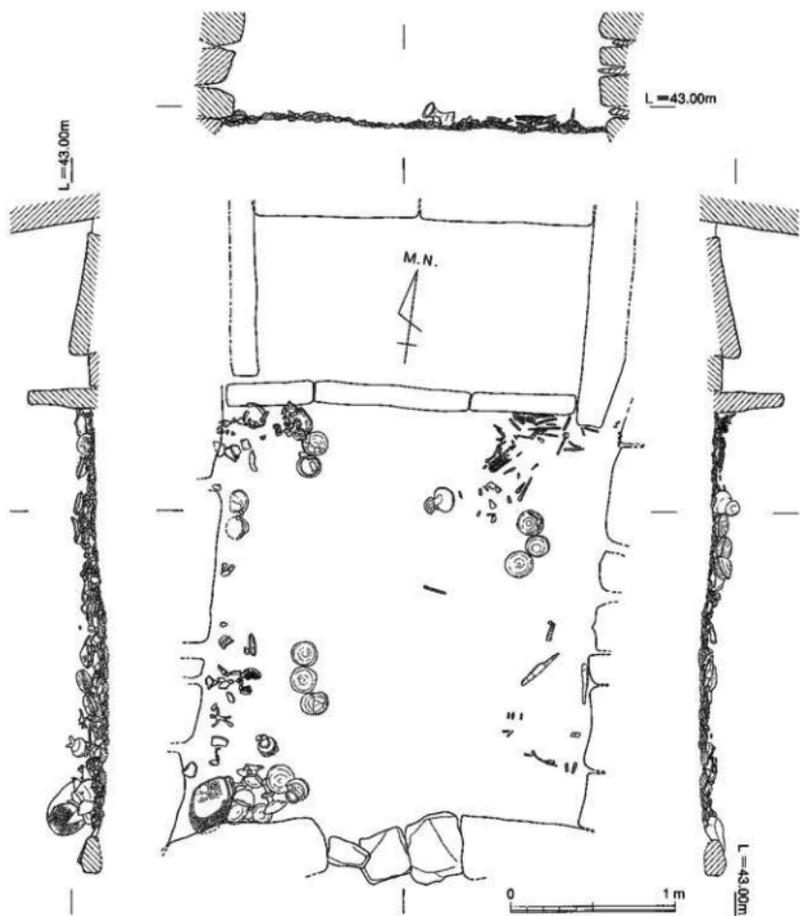
須恵器の型式や耳環の個数からすると、石屋形内および玄室内に数回程度の埋葬があったと想定される。耳環は10点出土しているが、その内8点が石屋形内からの出土であり、追葬も含めて石屋形が積極的に利用されていたようである。先述したように、石屋形の底石上には玉砂利が敷かれていたが、この中から耳環、勾玉、ビーズ玉などが出土しており、この状況が後世の人為的



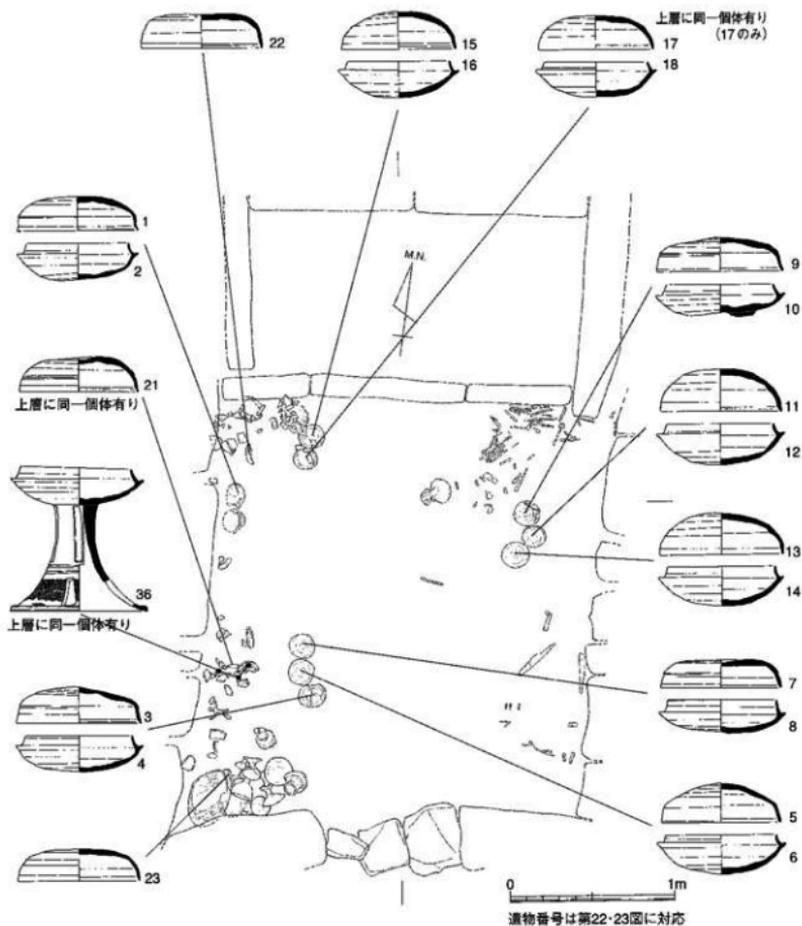
第15図 女室床面上層遺物出土状況図① (1:30)



第16図 玄室床面上層遺物出土状況図② (1:30)



第17図 玄室床面遺物出土状況図① (1:30)



第18図 玄室床面遺物出土状況図② (1:30)

な攪乱によるものか石屋形への追葬によるものか、さらに検討する必要がある。

溝道からは遺物はほとんど見られなかったが、第②層から土師器片が一点出土した。

床面調査後、床面下層の観察を行うために玄室中軸および溝道中央部に幅0.1mのサブトレンチを設定した。その結果、墳丘盛土同様、黒褐色粘質土（第③・④・⑤層）と明黄褐色粘質土（第⑥層）を交互に積んだのち、灰黄褐色砂質土（第⑦層）を置土を行い、その上に礫を敷いていることを確認した。第⑦・⑧層は側壁基底石の据え付け穴である。

## 第15節 出土遺物

石室内からは多様な遺物が出土した。現在も継続して整理中のため、第1表は平成15年3月末における概数である。本報告では、整理作業が終了した馬具と須恵器の一部のみを掲載する。

**馬具** 轡、杏葉、鞍金具、鍔金具、辻金具があり馬装が一通り揃う。

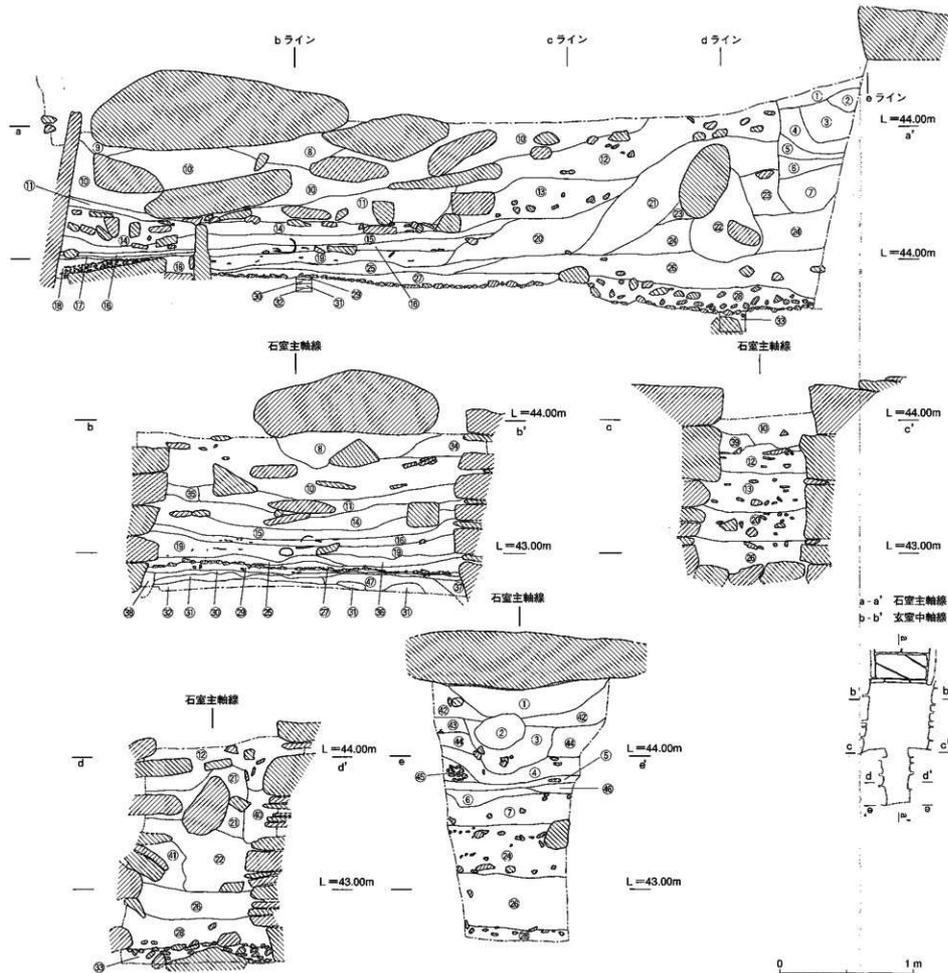
轡はf字形鏡板1対（第20図-1・2）、銜の破片などがある。鏡板（1・2）は全体の1/2から2/3が残存し、全長21cm前後に復元できる。轡装着時に下向きになる部分が2点あり、同じ大きさであったので1対と考えた。いずれも銜先を連結する中央部分は欠損する。鏡板は鉄地金銅張り、地板と縁金具をともに一枚の金銅板で覆う。縁金具には直径0.5cmの鉄を密に打ち、鉄頭には銀板を被せる。（1）の立附と吊金具は剣菱形杏葉に付随する可能性もあるが、鏡板片の付近から出土したため鏡板に付随すると考えた。吊金具は板状部分を途中から欠損するので全長は不明である。鉄銜に覆われているが、残存する板状部分には2箇所に鉄があり表面には皮革質が残るようである。吊金具の鉄頭は直径0.8cmで、鏡板の縁金具の鉄より大きい。

杏葉は剣菱形杏葉（第20図-3）がある。鉄地金銅張り、f字形鏡板とはほぼ同様のつくりである。そのためどちらのものか判別の難しい破片がある。楕円形と剣菱形の接する中央部分は鉄銜に覆われ、詳細は不明。全長25cm、幅13cm程度に復元できるが、接合しない破片があるため1個体以上になる可能性がある。

鞍金具は縁金具片と鞆1点がある。縁金具は鉄地金銅張り。幅約0.5cm、長さ15cm以上で密に鉄を打つ。出土時は一連で円弧を描いており原形を留めた。大きさ・形状からして鞍の磯の縁金具か。鞆は鉄製の輪金の基部に鉄製の脚を掲め、鞍の磯に打ち込む。脚の基部には鉄地金銅張りの円形座金具があり、脚の周囲には、木質が残る。

鍔金具は鍔吊金具片、兵庫鎖、鉤金具がある。鍔吊金具は幅約2cmの鉄板に釘を打ち、木製の鍔本体に固定するが、全て細片であり全容は不明である。兵庫鎖は3連以上で連結して残る破片が1点ある。1連の長さは約5cmを測る。鉤金具は、鉄棒を長方形に曲げた輪金と、それに掲めた巖手状の刺金からなる。長さ約7cm、幅約4cmを測る。

辻金具は、鉢部と脚部を一体につくる辻金具（以下、鉢状辻金具）と、組合せ式の板状の辻金具（以下、組合せ板状辻金具）の2種類がある（第21図）。鉢状辻金具（4～6）は、脚部にそれぞれ3本うった鉄と、脚基部の2条の責金具で革帯の交点を留める。本体は鉄地金銅張り、責金具と鉄頭は銀張り。鉢部は中央に大きく円形の穴があき、内部の痕跡からすると半球形の有機質部品を嵌め込むようである。（4・5）は脚部の配置が十字状、（6）はX字状である。3点とも鉢部は直径5.5cm、現存高1.0cm、脚部は幅2.0cm、長さ1.8～2.4cmを測る。図示した以外に1個



土色凡例

- ① 10YR5/2 にふい黄 砂質土 黒褐色砂質土を多く含む
- ② 木の根の攪乱
- ③ 2.5Y5/3 黄褐 砂質土
- ④ 2.5Y6/3 にふい黄褐 砂質土
- ⑤ 2.5Y5/3 黄褐 砂質土 黒褐色砂質土を含む
- ⑥ 2.5Y5/3 黄褐 砂質土
- ⑦ 10YR5/3 にふい黄褐 砂質
- ⑧ 10YR6/3 にふい黄褐 粘質
- ⑨ 10YR5/4 にふい黄褐 砂質
- ⑩ 2.5Y4/1 黄灰 粘性砂質
- ⑪ 2.5Y5/3 黄褐 粘質
- ⑫ 2.5Y5/3 黄褐 砂質
- ⑬ 10YR4/2 灰黄褐 砂質
- ⑭ 10YR3/1 黒褐 シルト
- ⑮ 10YR3/2 黒褐 粘質
- ⑯ 2.5Y3/1 黒褐 粘質
- ⑰ 10YR5/3 にふい黄褐 粘性砂質
- ⑱ 10YR5/3 にふい黄褐 シルト
- ⑲ 10YR4/3 にふい黄褐 砂質
- ⑳ 2.5Y5/1 黄灰 砂質 直径5~7mmの礫を含む
- ㉑ 10YR3/1 黒褐 砂質 黄褐色砂質土を少量含む
- ㉒ 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質
- ㉓ 2.5Y5/3 黄褐 砂質 黄褐色砂質土を少量含む
- ㉔ 直径3~5mmの白色粒を若干含む
- ㉕ 2.5Y6/3 にふい黄褐 砂質 直径5~10mmの礫を含む
- ㉖ 10YR5/3 にふい黄褐 砂質 直径3~5mmの礫を少量含む
- ㉗ 2.5Y3/1 黒褐 砂質 黄褐色砂質土を少量含む
- ㉘ 10YR3/3 暗褐 砂質
- ㉙ 10YR2/2 黒褐 粘質
- ㉚ 10YR4/2 灰黄褐 粘質
- ㉛ 10YR3/2 黒褐 粘質
- ㉜ 10YR7/6 明黄褐 粘質
- ㉝ 10YR3/2 黒褐 粘性砂質
- ㉞ 10YR4/2 灰黄褐 粘性砂質
- ㉟ 10YR6/2 灰黄褐 砂質
- ㊱ 10YR5/2 灰黄褐 砂質
- ㊲ 2.5Y5/1 褐灰 シルト
- ㊳ 10YR2/3 暗褐 粘質
- ㊴ 7.5YR2/3 暗褐 粘質
- ㊵ 2.5Y6/3 にふい黄 粘質
- ㊶ 10YR5/3 にふい黄褐 砂質 直径5~15mmの礫を多く含む
- ㊷ 2.5Y5/3 黄褐 砂質 黄褐色砂質土を少量含む
- ㊸ 直径3~5mmの白色礫を若干含む
- ㊹ 2.5Y6/3 にふい黄 砂質
- ㊺ 10YR5/3 黄褐 砂質 黒褐色砂質土を含む 炭化物が若干干渉
- ㊻ 10YR6/3 にふい黄褐 砂質
- ㊼ 2.5Y6/2 灰黄 砂質 直径5~8mmの礫を多く含む
- ㊽ 2.5Y7/3 浅黄 砂質

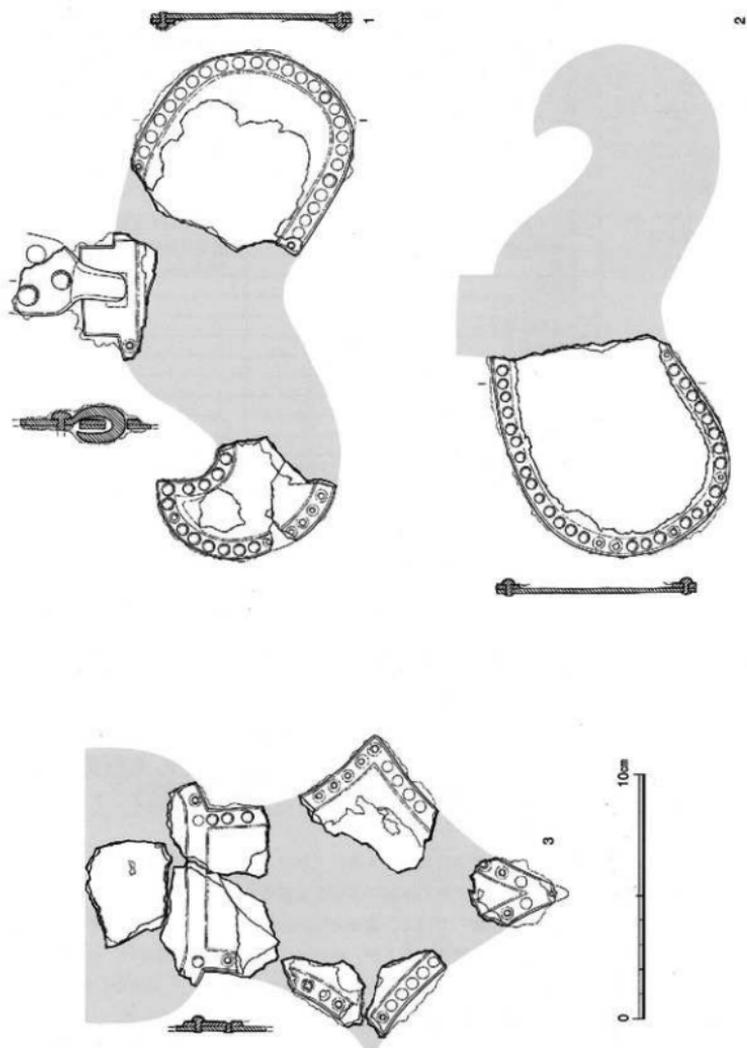
第19図 石室内埋土土層断面図 (1:30)

第1表 出土遺物一覧 (平成15年3月末現在)

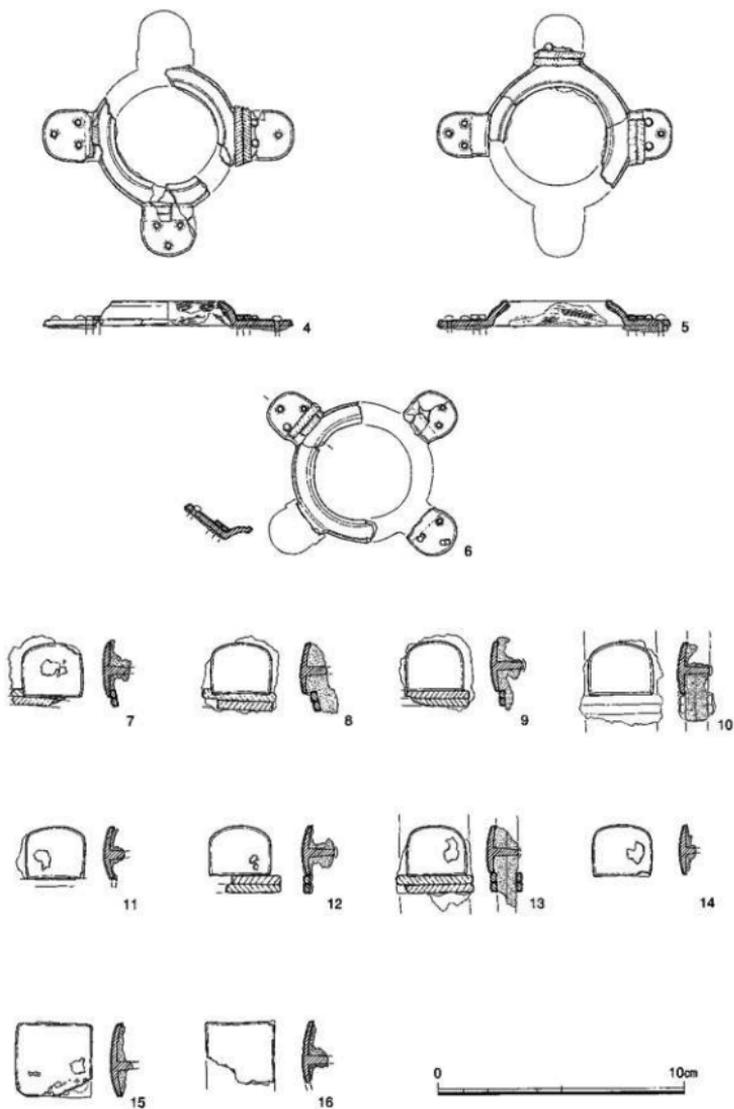
	種 別	個 数	備 考
須恵器	坏身	17	本報告掲載。
	坏蓋	18	本報告掲載。
	高坏	3	本報告掲載。
	壺	5	
	甌	2	
	甕	4	
	横瓶	1	
	裝飾付台付壺	2	体部に鹿などの裝飾有り。
土師器	高坏	15	
	甕	3	
	埴	1	
その他土器	黒色土器碗	2	後世再利用時遺物。
	土師器羽釜	1	後世再利用時遺物。
装身具	耳環	10	4対以上。
	銀製空玉	33	
	水晶製切子玉	8	
	水晶製算盤玉	4	
	琥珀製素玉	5	
	埋人製素玉	7	
	翡翠製勾玉	1	
	瑪瑙製管玉	2	
	碧玉製管玉	16	
	ガラス製管玉	2	
	土製丸玉	82	
	ガラス製白玉	94	
	琥珀製小玉	1	
	ガラス製小玉	343	
馬具	鉄地金銅張「字形鏡板付轡	1	本報告掲載。
	鉄地金銅張剣菱形杏葉	1	本報告掲載。
	辻金具	10	本報告掲載。
	引手金具	-	数量未確認。
	輪鍔	1	
	鞍金具	1	
武具	鉸具	-	数量未確認。
	鉄刀	1	切先のみ残存。
	刀子	1	
	鉾	3	
	石突	1	
	鉄鏃	150	破片多数。数量未確定。
その他金属器	不明鉄製品	1	鉄地金銅張り。
	不明銀製品	1	滴型。銀製?

体分以上の破片があるため、鉾状辻金具は合計4点以上ある。組合せ板状辻金具(7~16)は爪形金具と方形金具があり、いずれも鉄製の地板の表面を金銅板で覆い、裏面に脚鉾がある。爪形金具の基部には2条の責金具が付着して残る。責金具は鉄地銀張り。方形金具で革帯の交点を留め、その四方に爪形金具を配置する構造であるが、組合って出土したものはない。爪形金具は幅2.5cm、長さ2.0~2.2cmを測る。(15)の方形金具は3.1×3.2cmを測る。図示した以外にも破片があり、爪形金具だけで合計10点以上あるため、組合せ板状辻金具は3組以上が存在する。

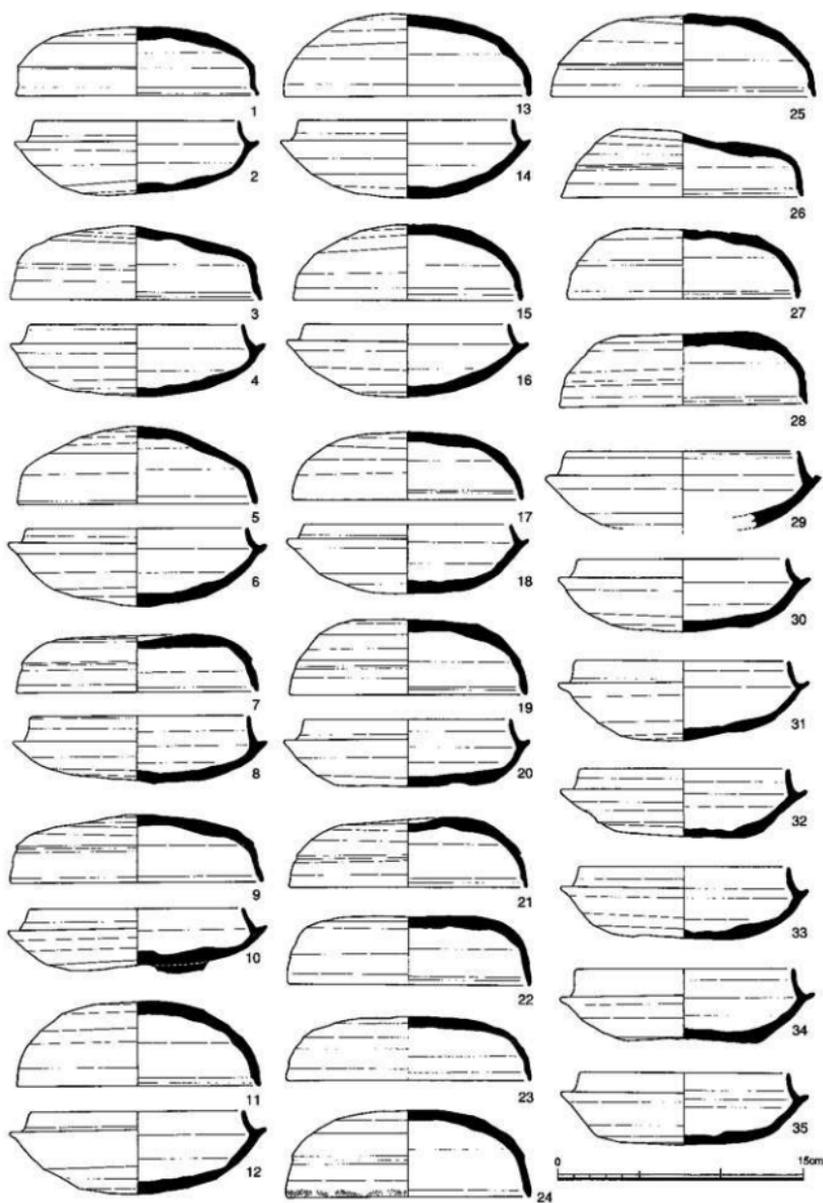
馬具は、ほとんどが破片となって玄室東半一面から出土した。鞍金具が玄室東南隅の床面直上で出土した以外は、床面直上で出土したものは少ない。杏葉(3)と鉾状辻金具3点(4~6)が玄室東南から出土しており、玄室東南に集中する傾向はある。鉾状辻金具のその他の破片は、玄室中央から東南側にかけて出土した。それに対し組合せ板状辻金具(7~16)は玄室中央の北



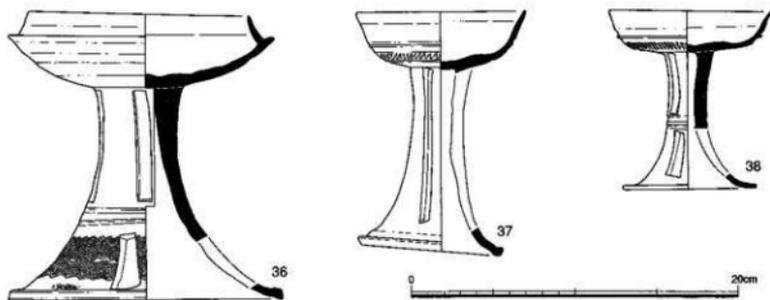
第20図 出土馬具実測図① (1:2)



第21圖 出土馬具實測圖② (1:2)



第22图 出土须惠器实测图① (1:3)



第23図 出土須恵器実測図②(1:3)

寄りにやや集中した。轡、鍍金具は玄室東半の広範囲に破片が散乱して出土した。

須恵器 出土した須恵器が大量であるため、坏身・坏蓋・高坏のみを優先的に抽出し整理作業を行った。その結果、本報告では、坏蓋18点、坏身17点、高坏3点、計38点を図示した。この内、坏蓋と坏身がセット関係のものが10組ある。

坏蓋は18点出土している。口径は13.8~15.8cmで平均14.7cmである。全体的に粗雑に作られているものが多い。天井部は丸みを帯びる一群、扁平な形態を呈するものの2種類が存在し、扁平なものが大半を占める。口縁端部は丸く仕上げられ、端部内面には稜がみられる。稜は鋭いものと鈍いものがあり、段を有するものや稜と口縁部の間に細い凹線をめぐらすものなど口縁には様々な形態がみられる。口縁部と天井部との境界に凹線がめぐらされているもの、沈線が消失しているものがある。ここから凹線をめぐらしているものが徐々に薄くなり、消失するという型式差をみることができる。また凹線の変化に合わせて、口縁内面の稜は鋭いものから鈍いものへと変わり、やがて退化すると端部側に凹線を有するような変化もみられる。追葬の可能性も土器の出土位置や耳鎖などの他の遺物とともに検討する必要がある。(24)の須恵器は口縁外面にヘラ状工具でつけた斜め方向の文様がみられる。

坏身は17点出土している。口径は12.4~14.0cmで平均12.9cmである。立ち上がりは高く直口的なものや低く内傾するものまで様々な形態がみられ、折りこみ手法で形成されていると思われる。口縁端部は丸く取め、受け部は水平に引き出すものと上方につまみ出すものの2種類が存在する。受け部は口縁端部と同様に丸く取める。底部は丸みをもつものと扁平なものがみられる。坏蓋同様に粗雑につくられているものが多い。立ち上がりが高く直口的なものから低く内傾するものへと変化する時期差を推定することが出来る。これはセット関係にある坏蓋との変化と同様と思われる。坏蓋(11)(13)と同様に坏身(12)(14)は灰白色を呈し、他にはみられないような丸みを帯びたつくりを特徴としている。これらは製作工人や窯の違いを表わす可能性がある。(29)は受け部が短く平坦面を作り、薄い凹線が見られる。また、基部には凹線をめぐらしている。

高坏は大型のもの(36)と小型のもの(37)(38)が出土している。(36)は受け部をもつ蓋高坏で、立ち上がりは高く、受け部は水平気味に引き出している。脚部は細長くラッパ状に開き、端部は下に小さくつまみ出し、薄い凹線がめぐっている。出土した須恵器の中でもっとも精巧に作られ

第2表 出土須臾器観察表①

遺物No	出土単位	器種	法量(cm)・胎上・焼成・色調・クワ回転・残存率	特徴	備考
1	女室床面直上	坏壺	口径:14.6/器高:4.2 胎土:黄/直径1~2mmの白色粒を多く含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)明黄灰(断面)灰白/クワ回転:左/残存率:口縁85%	天井部はやや丸みを帯び底部は直口のむち上がり。口縁部は端部を小さくつまみ出し丸く収める。肩部は内傾する雷をもち、段を持つ。口縁部は外側に張り出している。天井部は回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	
2	女室床面直上	坏身	口径12.4/受部径14.6/器高4.6 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を含む/ 焼成:良好/色調:(外面)淡青灰(内面)淡青灰(断面)淡青灰/クワ回転:左/残存率:口縁95%	底部は丸みをもち、上部はやや扁平である。立ち上がりは直1的の内傾する。受け部ははやや平らにのびる。口縁端部、受け部にも丸く収める。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	No1とセット
3	女室床面直上	坏壺	口径15.2/器高4.5 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)暗青灰(断面)暗青灰/クワ回転:右/残存率:口縁85%	天井部は丸みをもち、天井部と底部を分ける内縁は明瞭、口縁端部は丸く収め、端部には内傾する雷をもち、天井部外面は回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面は回転ナダ調整後、天井部内面のみ一定方向のナダ。	No4とセット
4	女室床面直上	坏身	口径13.0/受部径15.3/器高4.4 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を多く含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)暗青灰(断面)暗青灰/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部はやや丸みを帯び、立ち上がりは直1的。受け部は上方につまみ出す。肩部はやや平らにのびる。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ調整。中心部一定方向のナダ。	No3とセット 外面には産物時に付着片あり
5	女室床面直上	坏壺	口径14.3/器高4.9 胎土:黄/直径1~2mmの白色粒を若干含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)灰白/クワ回転:左/残存率:口縁100%	天井部は丸みを帯び、天井部と底部を分ける内縁は明瞭を有し丸く収める。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	No5とセット
6	女室床面直上	坏身	口径13.2/受部径15.6/器高4.8 胎土:黄/直径1~2mmの白色粒を若干含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)灰白/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部は丸みを帯び、立ち上がりは直1的である。肩部は受け部と同様に丸く収める。受け部はやや平らにつまみ出す。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整後、底部のみ指すナダ。	No5とセット
7	女室床面直上	坏壺	口径14.6/器高3.5 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を多く含む/ 焼成:良好/色調:(外面)暗青灰(内面)暗青灰(断面)灰褐/クワ回転:右/残存率:口縁100%	全体的に粗雑で、天井部は扁平、一部むち。底部は内傾し、口縁端部には明瞭な段がみられ、天井部と底部を分ける内縁がある。調整は天井部は回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。中心部一定方向のナダ。	No8とセット
8	女室床面直上	坏身	口径13.2/受部径15.4/器高4.1 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)暗青灰(断面)灰褐/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部はやや扁平、外部から緩やかに丸みを帯びる。立ち上がりは直1口縁部は丸く収める。受け部は水平きみにつまみ出し口縁端部と同様に丸く収める。全体的に粗雑。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。中心部一定方向のナダ。	No7とセット
9	女室床面直上	坏壺	口径15.2/器高4.2 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を多く含む/ 焼成:良好/色調:(外面)暗青灰(内面)暗青灰(断面)赤褐/クワ回転:右/残存率:口縁100%	天井部はやや扁平、外部は凹線がみられ緩やかに直口。口縁端部は外反し、内面はわずかに稜を持つ。全体的に粗雑。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	No10とセット
10	女室床面直上	坏身	口径12.8/受部径15.7/器高3.8 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を含む/ 焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)暗青灰(断面)赤褐/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部はやや扁平、外部は緩やかに立ち上がり口縁は直1的に内傾し、端部は丸く収める。受け部はやや平らにつまみ出し丸く収める。全体的に粗雑。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。底部外面には産物時付着の灰褐色片がある。内面は指すナダ。	No9とセット
11	女室床面直上	坏壺	口径14.6/器高5.3 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を若干含む/ 焼成:やや不良/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/クワ回転:右/残存率:口縁100%	天井部はやや扁平で、外部は緩やかに内傾し、口縁はわずかに外反する。底部は丸く収め、内面には明瞭な段がみられる。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	No12とセット
12	女室床面直上	坏身	口径12.8/受部径15.5/器高5.1 胎土:黄/直径1~2mmの白色粒を少量含む/ 焼成:やや不良/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部は丸みを帯び、立ち上がりはやや内湾きみである。口縁端部と受け部は丸く収める。その受け部はやや上方につまみ出す。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。底部調整後に指す口縁による稜が認められる。	No11とセット
13	女室床面直上	坏壺	口径14.8/器高5.1 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を少量含む/ 焼成:やや不良/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/クワ回転:右/残存率:口縁100%	天井部は丸みを帯び、やや内湾する外部から口縁部は直1的に立ち上がる。端部の内面には鋭い稜がみられ、丸く収める。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面はナダ調整。	No14とセット
14	女室床面直上	坏身	口径13.0/受部径15.2/器高4.8 胎土:黄/直径1mm以下の白色粒を少量含む/ 焼成:やや不良/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/クワ回転:右/残存率:口縁100%	底部は丸みを帯び、立ち上がりは直1的にのびる。端部は受け部と同様に丸く収める。受け部は水平きみにのびる。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部は回転ナダ、内面は茶褐色の有機質付着片あり	No13とセット 内面に茶褐色の有機質付着片あり

第3表 出土須恵器観察表②

遺物No	出土層位	器種	法量(cm)・胎土・焼成・色調・ロクロ回転・残存率	特徴	備考
15	支室床面直上	坏蓋	口径13.8/器高4.6 胎土：青/直径1～2mmの白色粒を少量含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 暗青灰(内面) 黄灰(断面) 暗青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径100%	天井部は丸みを帯び、1線部はかすまつきみ出し、内面に鋭い稜がみられる。調整は天井部は回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No16とセット
16	支室床面直上	坏身	口径12.5/受部径14.6/器高4.2 胎土：青/直径1～2mmの白色粒を少量含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 暗青灰(内面) 黄灰(断面) 暗青灰/ロクロ回転：左/残存率100%	底部は丸みを帯び、底部は緩やかに立ち上がる。受け部はやや上方につきみ出し、直1線に内側する口縁の端部と同様に丸く収める。調整は底部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No15とセット
17	支室床面直上	坏蓋	口径14.6/器高4.2 胎土：青/直径1mm以下の白色粒を若干含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 黄灰(内面) 暗青灰(断面) 暗青灰/ロクロ回転：右/残存率：口径90%	天井部は比較的平坦でやや内寄する底部から口縁部は直線的に立ち上がる。底部は丸く収められ、底部内面には凹線が一束めぐる。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No18とセット
18	支室床面直上	坏身	口径12.6/受部径14.7/器高4.2 胎土：青/直径1～2mmの白色粒を少量含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 暗青灰(内面) 暗青灰(断面) 暗青灰/ロクロ回転：右/残存率：口径100%	底部はやや丸みを帯び、立ち上がりは比較的ゆるく、内湾がみられる。底部は丸く収められ、底部内面には凹線が一束めぐる。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No17とセット
19	支室床面上層	坏蓋	口径14.4/器高4.6 胎土：青/直径1～3mmの白色粒を多く含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 青灰(内面) 明青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径75%	天井部は扁平、底部はわずかに内寄。天井部と底部をわけける凹線は明瞭な部分もあるが、全周はしない。底部内面は内湾し、わずかな稜をつくる。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No20とセット
20	支室床面上層	坏身	口径12.6/受部径15.0/器高4.1 胎土：青/直径1～3mm前後の白色粒を多く含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 黄灰(内面) 青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径90%	底部は扁平で立ち上がりは内湾し口縁端部は丸く収める。受け部は上方につきみ出し丸く収める。底部は回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No17とセット
21	支室床面直上層	坏蓋	口径14.4/器高4.3 胎土：青/直径1～3mmの白色粒を含む/焼成：良好/色調：(外面) 暗青灰(内面) 青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径65%	天井部は外郭からの圧力により、凹みをみせる。口縁はやや内湾に立ち上がり、内湾はわずかに稜を有する。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	No19とセット
22	支室床面直上	坏蓋	口径14.8/器高4.2 胎土：青/直径1～5mmの白色粒を多く含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 暗青灰(内面) 暗青灰(断面) 暗青灰/ロクロ回転：右/残存率：口径60%	天井部は扁平で直線的。口縁部はやや内湾し底部から直1線に立ち上がる。底部は丸く収める。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
23	支室床面直上	坏蓋	口径14.8/器高4.9 胎土：青/直径1～3mmの白色粒を多く含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 青灰(内面) 青灰(断面) 灰白/ロクロ回転：右/残存率：口径50%	天井部は平坦で底部は緩やかに内湾し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く収め、内面に稜を有する。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整後に底部にはケズリの痕と圧痕が見られる。	
24	支室床面上層	坏蓋	口径14.8/器高5.3 胎土：青/直径1mm以下の白色粒を若干含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 淡青灰(内面) 淡青灰(断面) 淡青灰/ロクロ回転：右/残存率：口径50%	口縁端部は内湾し、丸く収める。底部の外周には左上から右下にかけての斜め方向のヘア状突起による刻み目がついてくる。底部は丸みを帯びており、天井部と底部をわけける凹線がみられる。調整は天井部は回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整、中心は不定方向のナゲ。	
25	支室床面上層	坏蓋	口径15.8/器高5.1 胎土：青/直径1～5mmの白色粒を多く含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 青灰(内面) 黄灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径50%	他の坏蓋よりもやや大形。天井部は扁平。内湾に立ち上がる口縁端部は内湾して稜を有し、丸く収める。天井部と底部をわけける凹線は明瞭。調整は天井部が回転ヘラケズリ、底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
26	支室床面上層	坏蓋	口径14.5/器高4.2 胎土：青/直径1～2mmの白色粒を含む。直径1mm前後の黒色粒を若干含む/焼成：良好/色調：(外面) 青灰(内面) 淡青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径90%	天井部は丸みを帯びているが、外面は回転ヘラケズリの調整後に指でおさえられている。口縁端部は内湾して面をつくり、丸く収める。底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
27	支室床面上層	坏蓋	口径14.0/器高4.2 胎土：青/直径1～3mmの白色粒を含む/焼成：良好/色調：(外面) 明青灰(内面) 青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：左/残存率：口径100%	天井部は扁平で、底部は緩やかに内湾し、口縁端部に面を有す口縁内面には凹線がめぐる。調整は天井部が回転ヘラケズリ、口縁部～底部は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
28	支室床面上層	坏蓋	口径15.0/器高4.5 胎土：青/直径1～2mmの白色粒を若干含む/ 焼成：良好/色調：(外面) 淡青灰(内面) 青灰(断面) 青灰/ロクロ回転：右/残存率：口径90%	天井部は平坦で底部は内湾し、口縁部は端部を小さくつきみ出し、内湾に面をつくり、丸く収める。調整は天井部が回転ヘラケズリで底部～口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	

第4表 出土須恵器観察表③

遺物No	出土部位	器種	法量(cm)・胎土・焼成・色調・口ノコ回転・残存率	特 徴	備 考
29	玄室床面 上層	坏身	口径14.0/受部径15.4/器高4.4 胎土:密/底径1~2mmの白色粒を少量含む/焼成: 良好/色調:(外周)青灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:右/残存率:11線30%	受け部は丸く収め、引き出しは小さく、基部に明瞭な凹線がめぐっている。受け部にも小さな凹線がめぐっている。立ち上がりは直出し、1線基部には段を食う。また、口ノコの凹線は基部に向にクランクでつけられたような形状がある。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
30	玄室床面 上層	坏身	口径12.6/受部径15.2/器高4.5 胎土:密/底径1~5mmの白色粒を少量含む/焼成: 良好/色調:(外周)淡青灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:11線70%	底部は平皿状で、やや凹凸がみられ体的に粗雑である。立ち上がりは反りぎみに内出し、1線基部と同様に丸く収める。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~1線が回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
31	玄室床面 上層	坏身	口径12.9/受部径15.1/器高4.6 胎土:密/底径1~3mmの白色粒を多く含む/ 焼成:良好/色調:(外周)青灰(内周)淡青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:口縁70%	底部はやや扁平で、立ち上がりは直門的に内膳する。受け部はやや水平につまみ出し、1線基部と同様に丸く収める。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~1線が回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
32	玄室床面 上層	坏身	11径12.6/受部径14.9/器高4.3 胎土:密/底径1mm以下の白色粒を少量含む/ 焼成:良好/色調:(外周)灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:口縁80%	底部はやや扁平で作りは粗雑である。立ち上がりは反りぎみに内膳する。口縁基部は丸く収める。受け部は上方につまみ出し、同様に丸く収める。調整は回転ヘラケズリ、体部~口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	底部外周に緑色の自然釉。
33	玄室床面 上層	坏身	11径12.6/受部径15.0/器高4.5 胎土:密/底径1mm前後の白色粒を少量含む/ 焼成:良好/色調:(外周)青灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:口縁95%	底部はやや扁平で立ち上がりは直口ぎみにのびる。口縁基部は受け部と同様に丸く収める。受け部はやや厚く、水平にひき出している。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
34	玄室床面 上層	坏身	口径13.2/受部径15.4/器高4.6 胎土:密/底径1mm以下の白色粒を少量含む/ 焼成:良好/色調:(外周)青灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:口縁90%	底部はややへこんでおり、立ち上がりは直口的に内膳する。1線基部は受け部と同様に丸く収める。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
35	玄室床面 上層	坏身	11径12.6/受部径15.1/器高4.4 胎土:密/底径1~2mmの白色粒を少量含む/焼成: 良好/色調:(外周)青灰(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:右/残存率:口縁80%	底部は扁平で、立ち上がりは直口的にのびる。基部は受け部と同様に丸く収め、調整は底部が回転ヘラケズリ、体部~口縁は回転ナゲ、内面はナゲ調整。	
36	玄室床面 面上層	高坏	口径13.2/脚部径15.5/脚端部径16.7/器高17.5 胎土:密/底径1mm以下の白色粒を若干含む/ 焼成:良好/色調:(外周)坏部青灰/脚 部黄灰(内周)坏部青灰/脚部黄灰/(断面) 赤黄/口ノコ回転:左/残存率:口縁80%脚部 90%	坏部部はゆるやかに膨らんで立ち上がり、受け部は水平につまみ出し。立ち上がりは直立的に内膳する。脚筒部には2本の凹線がめぐり、それを挟んだ上下に2段の方形の溝がそれぞれ互い違いにある。脚部下部には帯状の波状文を施す。調整は坏部下半がヘラケズリの他はナゲ、坏の底部内面にはメサセと不定方向の調整がみられる。	
37	玄室床面 上層	高坏	口径10.4/脚部径16.8/脚端部径18.0/器高14.9 胎土:密/底径1~3mmの白色粒を少量含む/焼成: 良好/色調:(外周)灰白(内周)青灰(断面) 青灰/口ノコ回転:左/残存率:11線95%脚部 80%	口縁部はわずかに外反し、1線部と底部をわける線は鋭きを欠く。坏底部近くには連続的斜刺状文をめぐらす。脚部は細長い方形の透かしが3方向にみられ、透部は上方面に小さくつまみ出している。	坏底部から口縁部まで一部と脚部面に黒色の自然釉。
38	玄室床面 上層	高坏	口径9.9/脚部径13.4/脚端部径13.1/器高11.0 胎土:密/底径1~2mmの白色粒を少量含む/ 焼成:良好/色調:(外周)坏部黄灰/脚 部黄灰(内周)坏部黄灰/脚部黄灰/口ノコ回転: 右/残存率:11線90%脚部90%	口縁部は外反し、底部との境界に明瞭な線をもつ。その上下には弱い凹線がめぐり、底部近くには帯状斜刺状文(大上から右下にかけて)がめぐっている。脚部はラッパ状に開き、基部は平坦面を有する。脚筒部には2本の凹線を挟んだ上下2段に方形の透かしが3方向入る。	坏部外周に一部自然釉。

ている。(37)は透かし窓が3方向に入っており、他の2点は透かし窓が凹線を隔て、2段に互い違いに3方向入っている。(38)は小型であり、坏部に明瞭な稜がみられ、その上下に凹線がみられる。また、坏底部の櫛描列点文の下にも小さな稜を隔て2本の凹線が巡っている。脚筒部は厚めのつくりになっており、脚部部は他の2点と異なり、上下に引き出すような手法は使われておらず、基部は丸くおさめる。緑色の自然釉がかかっているのは、これと(32)の坏身にしかみられない特徴である。(37)は坏底部にめぐらす連続的斜刺状文は不規則で所々消えている。坏部に見られる稜は鈍くなるが、坏部の形態は(38)と類似しているが、脚部は裾に近くになって、急に開く他の2点とは異なる形態がみられる。また、透かし窓は完全に空いているのではなく、塞がっている部分もみられる。

## 第16節 まとめ

菊塚古墳は、ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室を埋葬主体とする前方後円墳である。墳丘は流出や削平を受け石室も上部が崩壊しているが、床面の遺存状態は極めて良好で多数の遺物が出土した。以下、発掘調査および現段階での整理作業において明らかになった点を記す。

遺物について 石室内出土の遺物は、玄室内全域から出土した。その一方、羨道からは若干の土器片が出土しているのみである。出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類、耳環・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製勾玉などの装飾品、馬具・鉄鏃・鉄銚・石突・刀子などの鉄製品である。これらの遺物の中で、今回報告した須恵器杯・高坏について考えてみたい。

杯蓋は形態的特徴から、A類(1・3・7・21・23・25～28) B類(5・11・13・15・17)、C類(9・19・22・24)の3種類に細分が可能である。A類は口径14.0～15.8cm(平均14.8cm)、器高3.5～5.1cm(平均4.4cm)を測る。天井部は平坦もしくはわずかに丸みをおび、口縁端部内面には段を有する。B類は口径13.8～14.8cm(平均14.4cm)、器高4.2～5.1cm(平均4.8cm)を測る。天井部は丸みを帯び、口縁端部内面には段を有する。C類は口径14.4～15.2cm(14.8cm)、器高4.2～5.3cm(平均4.6cm)を測る。天井部は平坦もしくはわずかに丸みをおび、口縁端部は丸く収める。A類とC類の口縁端部を比較すると、A類の方が段は明瞭である。須恵器の形態の変化から考えると、A類→B・C類という変遷が想定できる。坏身も同様に口径、底部の形態などから3種類に細分することが出来る。この差違は坏蓋の分類・変遷とも対応する。

高坏は有蓋高坏1点、無蓋長脚高坏2点の計3点が出土した。無蓋高坏2点は、口縁部の形状、脚部の長さ、透かしの入り方など明らかな形式差が認められる。

これらの特徴を基準に田辺頼年(1977)に当てはめれば、坏A類および高坏(36)(37)は、MT85型式併行期、坏B・C類および高坏(38)は、TK43型式併行期に相当すると考える。このことから須恵器の実年代は、おおそ6世紀後半を中心とした時期に当たる。他の遺物とも照合しなければならないが、この年代が古墳の構築時期および追葬時期に該当すると思われる。

遺構について 石室は両袖式の横穴式石室である。その形態は、石屋形を備えていることは勿論のこと、羨道が狭く袖部が内側に突出しているなど東北東約400mに位置する王墓山古墳と類似性が高い。以下、王墓山古墳と比較しながら検討を行う。

石室の位置は、後円部のほぼ中央部に位置する。後円部の直径を以前に調査した通り39mと仮定すると、奥壁がほぼ中心にあたる。王墓山古墳も奥壁付近が後円部の中心にあたり、いずれの古墳も奥壁の位置が墳丘の設計にも大きく影響していたと考えられる。調査で確認はしていないが、開口部は南側くびれ部にあったことは確実である。羨道床面の標高は42.6m前後を測り、この高さが墳丘テラス面の標高とほぼ一致することから、このテラス面上に石室を構築したと考えられる。

菊塚古墳の石室規模は、玄室長3.85m以上、玄室幅3.34m、玄門幅0.81m、羨道長1.75m以上、羨道幅0.93mを測る。対して王墓山古墳は、玄室長3.25m、玄室幅2.25m、玄門幅0.68m、羨道長4.68m、羨道幅0.79mを測る。各部の規模を比較してみると、全ての数値において菊塚古墳が上回っている。王墓山古墳の各部位の数値をそれぞれ1として菊塚古墳の比率を換算すると、玄室長1:1.18、玄室幅1:1.48、玄門幅1:1.19、羨道幅1:1.18となり、各部位の比率は玄室幅以外は類似した数値となる。

石室壁体は上半分が崩落しており、羨道部分の孕みも著しい。天井石も失われているなど構造は不明な部分が多いが、残存部分について調査の結果、構造で知りえた知見を列挙してみたい。

- ①両袖式の石室で、袖部の石材の大きさは玄室・羨道の基底石よりは一回り大きい。明瞭な玄門立柱石はなく、若干意識した程度といえる。
- ②袖部の石は内側に若干せり出している。
- ③羨道幅は玄室幅と比して狭い。

このような石室構造上の特徴はいずれも九州型横穴式石室の特色と言える。石屋形の存在とともに九州地方との深い関係が推測できる。

石室の平面プランは、両袖式で南側隅部は鋭角となるのが特徴の1つに挙げられる。壁体の歪みが築造当初からのものであるのか、後世の地震や擾乱など築造後の所産によるものなのかは、今後の課題と言える。玄室のプランは直線的で、胴張りはならない。國木健司氏の定義する「九州型」横穴式石室の要素の内、この部分のみが該当しない。あるいはこうした要素の欠落が在地色の一つとも考えられる。

石室の構築順序は、奥壁と玄門が基準となっている。側壁は玄室・羨道とも奥壁側から順に構築している。そのため玄室において玄門付近の石材は間隔調整のため、石材の大きさも小振りで積み方も不自然である。材質は安山岩が中心で一部に凝灰角礫岩、閃緑岩もある。石材の選択については、特に意識したという感じではなく、むしろ石材の大きさが問題であったと考えられる。

石材の積み方は横長積みが基本であるが、一部、前述の通り間隔を調整している壁体部分には、小口積みが認められる。石材の大きさについては、特に下部に大きな石材が据えられているという訳ではなく、意図的な選択が行われたとは考えにくい。

石屋形の存在は、菊塚古墳の性格を考える上で最も顕著な遺構である。石屋形の位置が王墓山古墳とは異なっているのは前述した通りであるが、その他にも若干の差異がある。前壁は王墓山古墳のものは挟り込みの入った前壁1石のみであったが、菊塚古墳の前壁は中央に樞石を、その両側に袖石2石の計3石を配している。袖石は欠損しているものの、当初は天井まであった板石と思われる。この形態は肥後地方にある通常の石屋形の形態であり、王墓山古墳のものと比較して本来の形状をより意識したと思われる。石屋形の規模は、菊塚古墳が長さ2.41m、幅1.32m、屋根部までの高さ1.41m、王墓山古墳が長さ2.14m、幅1.16m、屋根部までの高さ1.52mを測り、平面的には菊塚古墳の方が規模が大きい。石屋形の王墓山古墳と菊塚古墳の比率も長さ1:1.13、幅1:1.14、高さ1:0.93となる。長さ・幅については、ほぼ同じ比率となっている。なお、王墓山古墳の玄室幅では床面付近では数値上は奥壁側に石屋形の長辺は取まるが、実際は壁体の持ち送りのため、石屋形を通常の位置に据えることは不可能である。年代的に後出する菊塚古墳の石屋形が九州地方の標準的な位置である奥壁側に据えられているのに対し、王墓山古墳の石屋形が玄室側壁に石屋形長辺を沿わせて据えられていた理由もこの辺りかも知れない。

今後の課題 本報告では、石室を中心に現段階で判明したものを報告した。繰り返しになるが、遺物の整理作業が完了していないため、今後の課題は非常に多岐にわたる。墳丘規模や墳形の問題、総合的な遺物の検討、埋葬順位（形態）の復元などは、次年度以降の調査や整理作業を通じて再度検討を行った上で、改めて提示したい。

## 第3章 三井遺跡

### 第1節 調査の概要

普通寺市中村町北部と多度津町にまたがる一帯は「三井遺跡」と呼ばれ、多度津町教育委員会によるこれまでの調査（第24図）で弥生時代前期の土坑・溝状遺構が確認され、土器・石器・木器等が出土している。今回の調査区はそれらの南方にあたり、遺物包蔵地である可能性が高いことから住宅建設に伴う工事のため調査を行った。調査年月日は平成15年1月24日及び2月24日である。

トレンチは、遺構面まで掘削が及ぶ可能性のある合併浄化槽（Aトレンチ）6㎡・名称板基礎（Bトレンチ）6㎡の部分と、擁壁の四面にそれぞれ数ヶ所（第1～8トレンチ）、合計10ヶ所22㎡を設定した（第25図）。



第24図 調査区周辺遺跡分布図（1：15,000）

### 第2節 遺構・遺物

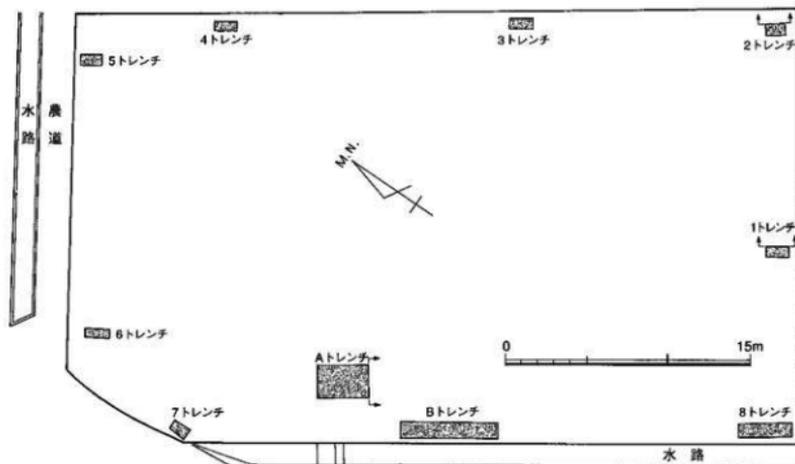
調査区の土層は3層に分層される。第1層は暗褐色土（耕土）、第2層は灰褐ブロック混黄褐粘質土（床土）、第3層は細礫混黄褐砂質土（基盤層）である。遺構は床土直下、基盤層上面で検出した。以下各トレンチごとに概要を説明する（第25・26図）。

【Aトレンチ】 トレンチの南東隅、基盤層上面で直径0.4m、深さ0.2mの土坑を検出した。埋土は、暗灰褐粘質土で、遺物は出土しなかった。掘削面がさらに下層に及ぶため、遺構面より1.2mの深さまで掘削を行ったが、下層は旧河道となっており人為的な痕跡は確認出来なかった。

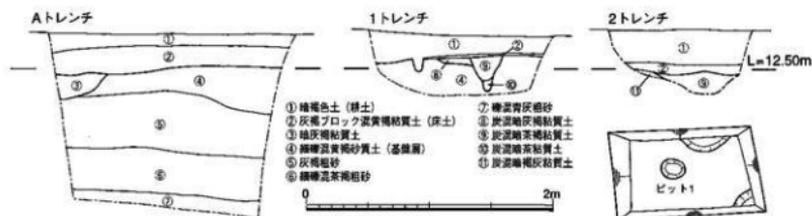
【Bトレンチ】 基盤層上面において遺構は検出されなかった。掘削面がさらに下層に及ぶため、遺構面より0.65m下層まで掘削したが、Aトレンチ同様下層は旧河道となっており人為的な痕跡は確認されなかった。

【第1～8トレンチ】 8ヶ所あけたトレンチのうち、第3～8トレンチに関しては、擁壁設置のための掘削深度が遺構面に及ばない、或いは調査区に西接する水路の護岸によってすでに攪乱をうけており、遺構面の検出には及ばなかった。ここでは、遺構面を検出した第1・2トレンチについてのみ記述する。

第1トレンチ トレンチ西壁基盤層上面において直径0.25m、深さ0.20mのピットを検出した。埋土は炭混暗茶褐粘質土及び炭混暗茶粘質土で、弥生土器の破片を含む。



第25図 調査区トレンチ配置図 (1:300)



第26図 調査区平・断面図 (1:40)

第2トレンチ 基盤層上面でピットを3基検出した。埋土はいずれも炭混暗茶褐色粘質土である。ピット1は直径0.2m、深さ0.16mの楕円形を呈しており、埋土からは弥生土器片が出土した。

### 第3節 まとめ

三井遺跡は、先学の研究により弥生時代前期の集落遺跡であることが認知されている。遺物分布地点は、多度津町大字三井から普通寺市中村町字西下所に及ぶが、遺跡の正確な範囲については不明である。今回の調査で平成4年度多度津町教育委員会の調査地点より、さらに南東で弥生時代の遺構面が存在することが明らかとなった。今後は周辺地域での発掘調査の増加に伴い、遺跡の正確な範囲が確定されることに期待したい。

## 【主要参考文献】

- 【陶邑古窯址群】Ⅰ 平安学園 1966年
- 【善通寺市の古代文化】矢原高幸 善通寺市 1973年
- 【善通寺市史・第一巻】善通寺市 1977年
- 【讃岐天霧城を探る】一市二町天霧城跡保存会 1980年
- 【須臾器大成】田辺昭三 1981年
- 【中の池遺跡発掘調査報告書】九亀市教育委員会 1982年
- 【天霧城跡発掘調査概報】一市二町天霧城跡保存会 1982年
- 【香川叢書・考古篇】香川県教育委員会 1983年
- 【日本の古代遺跡8 香川】保育社 1983年
- 【上墓山古墳調査概報】善通寺市教育委員会 1983年
- 【五条遺跡発掘調査報告書】善通寺市教育委員会 1983年
- 【仲村麁寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）】善通寺市教育委員会 1984年
- 【彼ノ宗遺跡】弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 善通寺市教育委員会 1985年
- 【仙遊遺跡発掘調査報告書】旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区 善通寺市教育委員会 1986年
- 【中村・乾・上一坊遺跡】四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書 第一冊 香川県教育委員会 1987年
- 【矢ノ塚遺跡】四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第三冊 香川県教育委員会 1987年
- 【県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書】善通寺市 香川県教育委員会 1987年
- 【九頭神遺跡発掘調査報告書】九頭神遺跡発掘調査団 善通寺市教育委員会 1988年
- 【稲木遺跡】稲木遺跡発掘調査団 1989年
- 【仲村麁寺】善通寺市教育委員会 1989年
- 【稲木遺跡】四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第六冊 香川県教育委員会 1989年
- 【水井遺跡】四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第九冊 香川県教育委員会 1990年
- 【月信遺跡】県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 月信遺跡発掘調査団 1991年
- 【史跡有岡古墳群（上墓山古墳）保存整備事業報告書】善通寺市教育委員会 1992年
- 【御館神社古墳発掘調査報告】善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 善通寺市教育委員会 1993年
- 【水井遺跡発掘調査報告書】都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団 1993年
- 【青龍古墳発掘調査報告書】善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

普通寺市教育委員会 1994年

『四国における横穴式石室の成立と展開』 古代学協会四国支部 1995年

『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地発掘調査報告書』 普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 普通寺市教育委員会 1995年

『香色山山頂遺跡群発掘調査報告書』 普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 普通寺市教育委員会 1996年

『旧練兵場遺跡Ⅲ』 平成7年度国立普通寺病院内発掘調査報告 香川県教育委員会 1996年

『旧練兵場遺跡』 国立普通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997年

『史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業報告書』 普通寺市教育委員会 1997年

『旧練兵場遺跡』 国立普通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第2冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998年

『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書』 普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 普通寺市教育委員会 1999年

『前方後円墳を考える』 古代学協会四国支部 2000年

『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書』 普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 普通寺市教育委員会 2001年

『旧練兵場遺跡』 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市・(財)元興寺文化財研究所 2001年

『みちくさ遍路』 普通寺市 2001年

『普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』 旧練兵場遺跡 四国学院大学構内遺跡 菊塚古墳 普通寺市教育委員会 2002年

『旧練兵場遺跡』 特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市・(財)元興寺文化財研究所 2002年

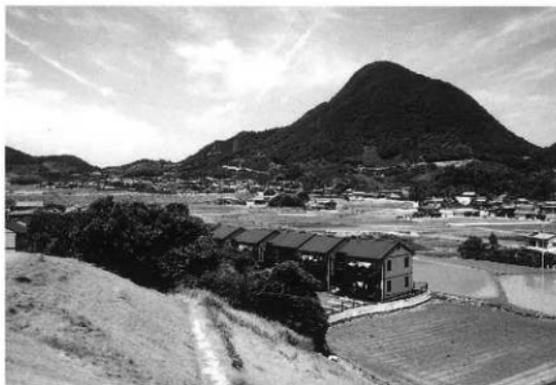


図 版  
(菊塚古墳)





1. 古墳遠景（北から）  
矢印部分が菊塚古墳



2. 古墳遠景（東から）  
王墓山古墳墳丘より望む



3. 古墳遠景（南から）  
左側の家屋が前方部

1. 石室検出状況（南から）



2. 石室検出状況（東から）



3. 石室形検出状況（西から）





1. 玄室床上層遺物検出状況（南から）



2. 玄室床上層遺物検出状況（東から）

1. 玄室内馬具出土状況 (1)



2. 玄室内馬具出土状況 (2)



3. 玄室内馬具出土状況 (3)





1. 玄室内裝飾付台付壺  
出土状況 (1)  
鹿胴部



2. 玄室内裝飾付台付壺  
出土状況 (2)  
鹿頭部 (矢印部分)



3. 玄室内裝飾付台付壺  
出土状況 (3)  
鹿胴部 (側壁の目地に人為的に入れられている)



1. 石屋形内金釦出土狀況



2. 玄室床面玉類出土狀況



1. 玄室床面遺物出土状況（西から）



2. 玄室床面遺物出土状況（部分・東から）



1. 玄室床面鉄製品出土状況 (1)



2. 玄室床面鉄製品出土状況 (2)



1. 玄室床面須惠器  
出土狀況 (1)



2. 玄室床面須惠器  
出土狀況 (2)



3. 玄室床面須惠器  
出土狀況 (3)

1. 玄室床面土器出土状况  
(南西隅)



2. 玄室床面土器  
出土状况 (1)



3. 玄室床面土器  
出土状况 (2)





1. 玄室床面完掘状況  
(西から)



2. 羨道床面完掘状況  
(北から)



3. 玄室床面下層深掘り  
トレンチ (南から)